

## 2 外部資金による研究

### [概要]

外部資金の導入による研究の活発化については、歴博が追求している課題の一つである。競争的研究資金の一つである日本学術振興会による科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）については、2020年度の新規採択件数は5件で、継続を含めた採択件数では29件、総額121,832千円であった（採択課題一覧参照）。

共同研究担当 松木武彦・柴崎茂光・松田睦彦

### [採択課題一覧]

	研究種目	代表者氏名	研究課題名
新規	基盤研究（A） 一般	箱崎 真隆	過去3万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究
	基盤研究（B） 一般	小倉 慈司	格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築
	基盤研究（C） 一般	仁藤 敦史	古代荘園と在地社会についての高度情報化研究
	基盤研究（C） 一般	福岡万里子	日本開国史の再構築―「開国のかたち」をめぐる国際的相剋の解明
	若手研究	橋本 雄太	データ駆動型歴史研究のための共用テキストレポジトリ構築
継続	新学術領域 研究領域提案	藤尾慎一郎	考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明
	新学術領域 研究領域提案	松木 武彦	集団の複合化と戦争
	基盤研究（A） 一般	後藤 真	「研究に真に使える」歴史資料情報基盤の構築―データ持続性研究と人文情報学の実践―
	基盤研究（A） 一般	齋藤 努	高精度同位体比分析装置を用いた古代日本における青銅器原料の産地と採鉱状況の研究
	基盤研究（A） 一般	村木 二郎	琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家
	基盤研究（A） 一般	坂本 稔	単年輪14C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明
	基盤研究（B） 一般	荒木 和憲	中世日本の東アジア交流史に関する史料の集成的研究と研究資源化
	基盤研究（B） 一般	日高 薫	17～19世紀の在外日本コレクション形成に関する基礎的研究
	基盤研究（B） 一般	松田 睦彦	朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究―イワシをめぐる韓国の民俗変化
	基盤研究（B） 一般	林部 均	官衙機構の動態からみた古代日本における境域の特質
	基盤研究（B） 一般	川村 清志	文化の主體的継承のための民俗誌の構築―マルチメディアの活用と協働作業を通じて
	基盤研究（B） 一般	三上 喜孝	古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開
	基盤研究（B） 一般	田中 大喜	西遷・北遷東国武士の社会的権力化
	基盤研究（B） 一般	横山百合子	「隠し売女」から「淫売女」へ―近世近代移行期における売春観の変容
基盤研究（C） 一般	原山 浩介	1970年代～80年代の消費者運動の再編成過程に関する実証的研究	

継 続	基盤研究 (C) 一般	鈴木 卓治	博物館展示の要素を取り入れた歴史資料画像Web閲覧の新手法の構築
	基盤研究 (C) 一般	松尾 恒一	日本仏教と東南アジア仏教との比較研究—政治と権力の視点を中心として
	基盤研究 (C) 一般	樋口 雄彦	幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究
	基盤研究 (C) 一般	樋浦 郷子	帝国日本における学校儀礼教育の歴史：声・音の検討を中心に
	若手研究	天野 真志	幕末維新期の角館地域を中核とした知的関係と政治意識の形成
	若手研究	吉井 文美	日中戦争期華中における占領地統治の進展と現地秩序の改変過程
	若手研究 (独立基盤形成支援)	吉井 文美	日中戦争期華中における占領地統治の進展と現地秩序の改変過程
	特別研究員 奨励費	間芝 志保	現代日本の先祖祭祀と文化的アイデンティティ—東アジアとの差異化の視点から—
	基盤研究 (C) 一般	三野 行徳	近代移行期、蝦夷地・北海道分領支配に関する歴史情報の復元的研究

## 【科研費研究（新規）】

### （1）基盤研究（A）

過去3万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究  
2020～2024年度

（研究代表者 箱崎真隆）

#### 1. 目的

日本の年輪年代法は2010年代に飛躍的な発展を遂げ、従来法では過去3000年間であった年代測定範囲が過去5100年間まで拡張された。その背景には「酸素同位体比年輪年代法」と「炭素14スパイクマッチング法」の確立・実用化がある。本研究は、応募者らがこれまでの研究で集めた過去3万年間の樹木年輪試料を用いて、1年単位の酸素同位体比分析および放射性炭素（炭素14）分析を網羅的に実施し、そのデータを解析することにより、日本列島周辺で起きた極端災害・極端気候を精密に編年する。さらには、最終氷期最寒冷期（LGM）の気候を1年～数百年のスケールで復元し他の時代との共通点や相違点を把握する。

#### 2. 今年度の研究計画

本研究は「精密編年に向けた基盤形成（標準年輪曲線と暦年較正曲線の構築）」と、その応用となる「気候変動・太陽活動復元」の2つを軸として、同時並行で進める。現状の過去5100年間の標準年輪曲線の構築状況から、一足飛びに過去3万年間を連続する標準年輪曲線を構築することは、試料の収集状況からいって不可能である。したがって、まずはこれまでの研究で得られた試料の分析を進め、協力関係を構築してきた研究機関と連携し、合意を形成したうえで、不足する試料の収集を進める。分析によって得られたデータから、酸素同位体比年輪年代法の標準年輪曲線を過去5100年間から過去3万年間に延長する。これにより、31-16ka最終氷期最寒冷期までを視野に入れた数多くの極端気候、極端災害の年代決定及び高精度気候復元が可能となる。

今年度は、標準年輪曲線の延長のため、手元にある三方低地中山埋没林の酸素同位体比分析を優先して実施する。また、7.3ka鬼界アカホヤ噴火の発生年を誤差0年で決定するべく、屋久島にて埋没木の採取調査を実施する。4.2-4.3kaイベントの精密復元を目指して、三瓶小豆原埋没林および三方低地黒田埋没林の酸素同位体比分析を実施する。必要に応じて、これらの試料の追加採取を実施する。国際標準暦年較正曲線IntCalと日本産樹木のオフセットが大きい時代である紀元前11-10世紀にかけて、鹿児島県の遺跡出土木材ならびに三重県の埋没木を用いて、網羅的な炭素14分析を実施する。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は2つの突発的事態によって、大幅な計画変更を余儀なくされた。1つは新型コロナウイルス感染拡大に

伴う緊急事態宣言である。在宅勤務を2ヶ月にわたって強制され、その間、出張調査と実験ができなくなった。もう1つは、豪雨の影響で岐阜県瑞浪市大湫町大湫神明神社の御神木の杉が、7月11日に倒壊したことである。この杉は推定樹齢1300年とされ、本州では極めて貴重な高齢現生木とみられたことから、緊急調査を実施した。地元の意向や関係する研究機関の都合から、この杉の調査と分析を最優先で進めなくてはならなくなり、ただでさえ少なくなったエフォートをこちらに大きく割くことになった。酸素同位体比年輪年代法と炭素14年代法によって、杉の真の樹齢は670年と判明した。推定樹齢の約半分であり、1000年以上にわたる長期的な気候変動・太陽活動の復元はできないとわかったが、一方で、非常に成長が良く、各年の年輪幅が広いことがわかった。すなわち、年輪をさらに細かく分割して分析することが可能で、この杉を使えば季節・月単位の気候変動・太陽活動の復元ができる可能性があり、新たな応用研究の道が拓けた。そのほかの分析として、4.2-4.3kaイベントの精密復元に向け、三方低地黒田埋没林の酸素同位体比分析を実施し、データの上積みをはかった。また、このデータをもとに構築した標準年輪曲線によって、福井城跡から出土した縄文時代後期の広葉樹の埋没木に誤差のない暦年代を与えることができた。これらの広葉樹からは年輪幅のデータも得られており、今後、各樹種の年輪幅の標準年輪曲線の核として利用できる可能性がある。このほか、鹿児島県の遺跡出土木材から3000年前前後の炭素14データを得ることができ、IntCalとの挙動の違いが明らかとなった。なお、予定していた屋久島の調査は新型コロナウイルスの感染状況をみて、次年度以降に実施することとした。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

- ◎箱崎 真隆 本館研究部・プロジェクト研究員
- 木村 勝彦 福島大学共生システム理工学類・教授
- 佐野 雅規 早稲田大学人間科学学術院・講師
- 三宅 美沙 名古屋大学宇宙地球環境研究所・准教授
- 坂本 稔 本館研究部・教授

## (2) 基盤研究 (B)

### 格・式研究を踏まえた日本古代社会の再構築 2020～2022年度 (研究代表者 小倉慈司)

#### 1. 目的

本研究は、最新の写本研究を踏まえて『類聚三代格』と『延喜式』という9～10世紀の基本史料テキストに再検討を加えることにより、古代社会を広い視野から捉え直し、その展開過程の解明を図ることを目標とする。

『類聚三代格』と『延喜式』は古代の法制である律令格式のうちの「格」と「式」にあたるが、これまで写本研究が充分になされないまま本文利用がなされてきた。近年進んだ両史料の写本研究を踏まえ、新たな本文校訂を進めつつ、それを踏まえて新たな古代社会像の再構築をめざす。9～10世紀は、以前より古代日本にとって大きな転換期であると考えられてきた。それは律令制の導入によって示された社会建設・制度設計が消化されつつ、実態に合わせて社会により適的な形に修正され、独自の日本的な制度社会が形づくられる過程として理解されてきたが、近年では加えて民間の交易活動も注目されるようになり、東アジア、さらには東部ユーラシア世界のなかで日本列島を捉えようという視点も高まっている。また地震や火山噴火等、自然災害への関心も高まり、世界的な環境・社会変動のなかで考えていこうとする見方もある。しかしこのような研究状況にもかかわらず、研究の基礎となるべき文献史料については十分な再検討がなされないままになっている。

そこで本研究では、最新の写本研究を踏まえて『延喜式』と『類聚三代格』という基本史料テキストを再検討することにより、古代社会を広い視野から捉え直し、その展開過程の解明を図る。

#### 2. 今年度の研究計画

本研究では『類聚三代格』と『延喜式』という2つの法制史料を主たる研究対象とする。

『類聚三代格』については、校訂本出版に向けて、これまでに底本選択や校訂方針の検討を進めてきた。本年度は巻1～4について実際に素原稿を作成して検討を加え、入稿できるような形にまで整えていくことを目指す。

『延喜式』については、既に写本系統の検討を進めた巻9・10を初めとして、10巻分程度の校訂本文作成を目指す。またこれまでに進めてきた延喜式関係論文目録データベースのデータ追加を進める。

海外発信については、申請段階では海外の若手研究者とともにワークショップを開催することを考えていたが、

昨今の状況に鑑み、国内のメンバーにて『延喜式』英訳について検討を進め、その叩き台を作成する。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

COVID-19の流行は続き、当初予定していた史料調査を実施することができず、『類聚三代格』に関しては巻1の素原稿を作成するにとどまった。そのため延喜式関係論文目録データベースのデータ追加に力を注ぎ、2020年12月までに23,415件のデータを追加して翌月に公開した(総件数41,820件。この他、既取データの修正も行なった)。『延喜式』英訳検討については、幸い外国人研究協力者2名とも国内に滞在していたため、ワークショップを1回(3月5日)、またZoom併用による英訳検討会を1回開催した(3月25日)。その他、基幹研究プロジェクト歴博ユニット「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」と共催して研究集会を2回開催した(詳細は同プロジェクトの項に記した)。

#### 【研究成果】

上述以外の研究成果は以下の通りである。

#### 【著書】

吉村武彦・吉川真司・川尻秋生, シリーズ古代史をひらく 文字とことば, 285p., 岩波書店, 2020年11月., ISBN978-4-00-028499-8

#### 【論文】

遠藤慶太, 神武天皇の末孫として一近世の神武天皇, 神武天皇論, pp.193-229, 榎原神宮庁, 2020年4月., ISBN978-4-336-06667-1

遠藤慶太, 時の簡について, 古代史論聚, pp.58-68, 岩田書院, 2020年8月., ISBN978-4-86602-104-1

遠藤慶太, 歴史叙述のなかの「継体」, 史学雑誌, 129 (10), pp.55-76, 史学会, 2020年10月, 査読有り, ISSN0288-2051

遠藤慶太, 景行紀の二人の皇后—婚姻伝承からみた国内統合—, 國學院雑誌, 121 (11), pp.122-139, 國學院大學, 2020年11月, 査読有り, ISSN0018-2478

小倉慈司, 前近代の年号—決定方法とその出典, 意味, 日本語学, 39 (4), pp.22-31, 明治書院, 2020年12月., ISSN0288-0822

小倉慈司, 『延喜式』, テーマで学ぶ日本古代史 社会・史料編, pp.231-240, 吉川弘文館, 2020年6月., ISBN978-4-08385-0

小倉慈司, 『延喜式』巻九・一〇の写本系統, 古代東アジア史料論, pp.71-98, 同成社, 2020年6月., ISBN978-4-88621-833-9

河合佐知子・遠藤基郎, 建長二年十月宣陽門院領六条殿分公事注進状の成立: 「建久二年十月日長講堂領目録」の再検討, 鎌倉遺文研究, 45, pp.24-27, 鎌倉遺文研究会, 2020年4月, 査読有り, ISSN13450921

河合佐知子, The “Royal Family Roster and Payroll Office Protocols” and Exploring Gender Power Relations at the Heian Court, 『延喜式』第39巻「正親司」の史料的价值を英語圏に伝えるために—ジェンダー的視点を取り入れて, 国立歴史民俗博物館研究報告, 228, pp.41-54, 国立歴史民俗博物館, 2021年3月, 査読有り, ISSN2867400

中村光一, 左近衛権少将藤原房雄の九州下向, 古代史論聚, pp.395-408, 岩田書院, 2020年8月., ISBN978-4-86602-104-1

仁藤敦史, コメント—古代王権論からみた天皇の位置づけ—, 民衆史研究, 99, pp.51-58, 民衆史研究会, 2020年5月, 査読有り., ISSN2867990

仁藤敦史, 古代の郡と郷をさぐる—下総国印旛の事例を中心に—, 千葉史学, 76, pp.13-14, 千葉歴史学会, 2020年5月., ISSN2868148

仁藤敦史, 五世紀史解釈の方法論をめぐって, 歴史科学, 242, pp.1-4, 大阪歴史科学協議会, 2020年8月, 査読有り, ISSN0910-5662

仁藤敦史, 白村江敗戦後の倭国と新羅・唐関係—『日本書紀』対外関係記事の批判的検討—, 東西人文, 14, pp.185-218, 慶北大学, 2020年10月, 査読有り

仁藤敦史, 「万世一系論」と女帝・皇太子, 歴史学研究, 1004, pp.2-11, 歴史学研究会, 2021年1月, 査読有り, ISSN3869237

仁藤敦史, 古代公文書の成立前史—漢字・暦・印・文書様式—, 国立歴史民俗博物館研究報告, 224, pp.7-28, 国立歴史民俗博物館, 2021年3月, 査読有り, ISSN2867400

仁藤敦史, 古代王権の成立, テーマで学ぶ日本古代史 政治・外交編, pp.2-11, 吉川弘文館, 2020年6月., ISBN978-4-642-08384-3

- 仁藤敦史, 王宮と古代王権・官僚制, 王宮と王都 講座・畿内の考古学Ⅲ, pp.22-40, 雄山閣出版, 2020年11月,, ISBN978-4-639-02729-4
- 仁藤敦史, 複都制と難波宮官人, 難波宮と古代都城, pp.161-171, 同成社, 2020年6月,, ISBN978-488621-842-1
- 堀裕, 王宮からみた仏教の受容と展開—七世紀から九世紀を中心に—, 日本宗教史4 宗教の受容と交流, pp.12-40, 法蔵館, 2020年11月,, ISBN978-4-642-01744-2
- 三上喜孝, 日本出土の古代木簡—古代地域社会における農業経営と仏教活動—, 木簡と文字, 24, pp.347-356, 韓国木簡学会, 2020年6月, 査読有り, 韓国語
- 三上喜孝, 韓国出土木簡にみえる海産物とその加工品, 国立歴史民俗博物館研究報告, 221, pp.123-139, 国立歴史民俗博物館, 2020年10月, 査読有り, ISSN2867400
- 三上喜孝, 古代日本論語木簡の特質—韓半島出土論語木簡の比較を通して—, 木簡と文字, 25, pp.173-189, 韓国木簡学会, 2020年12月, 査読有り, 韓国語
- 三上喜孝, 韓国出土の文書木簡～「牒」木簡と「前白」木簡を中心に～, 国立歴史民俗博物館研究報告, 224, pp.149-159, 国立歴史民俗博物館, 2021年3月, 査読有り, ISSN2867400
- 三上喜孝, 平泉出土文字資料へのアプローチ(1) 饗宴と文字, 平泉学研究年報, 1, pp.48-67, 2021年3月
- 三上喜孝, 古代史はLGBTを語れるか, 恋する日本史, pp.63-75, 吉川弘文館, 2021年3月, 査読有り, ISBN978-4-642-08394-2
- 山口えり, 日本古代の陰陽道と神祇信仰・仏教, 新陰陽道叢書 第一巻古代, pp.101-133, 名著出版, 2020年10月,, ISBN978-4-626-01874-8
- 書評
- 遠藤慶太, 書評と紹介「小口雅史編『古代東アジア史料論』」, 法政史学, 94, pp.102-112, 法政大学史学会, 2020年11月
- 遠藤慶太, 書評 読み替えられた日本書紀, 日本経済新聞, 48436, p.26, 日本経済新聞社, 2021年1月16日
- 小倉慈司, 書評「矢野建一著『日本古代の宗教と社会』」, 歴史評論, 840, pp.77-81, 歴史科学協議会, 2020年4月, ISSN
- 小倉慈司, 書評「『石母田正と戦後マルクス主義史学』をひもとく」, アリーナ, 23, pp.764-770, 中部大学, 2020年11月
- その他
- 小倉慈司, EFEO旧蔵資料中の典籍写本調査への期待, リテラシー史研究, 14, pp.76-84, リテラシー史研究会, 2021年1月
- 小倉慈司, 改元はいつ行われるのか?, REKIHAKU, 3, pp.100-101, 国立歴史民俗博物館, 2021年2月, ISBN978-4-909658-43-2
- 三上喜孝, ジェンダー史研究事始, REKIHAKU, 2, pp.26-31, 国立歴史民俗博物館, 2020年10月, ISBN978-4-909658-38-8
- Alessandro Poletto, On the Bureau of Medications and Scroll 37 of the Engi shiki, 国立歴史民俗博物館研究報告, 228, pp.1-14, 国立歴史民俗博物館, 2021年3月, 査読有り, 英語, ISSN2867400
- 【講演・口頭報告】
- 遠藤慶太, 日本書紀と神社・謡曲, 神道文化会公開講演会, オンライン開催, 2020年6月20日,, 招待
- 遠藤慶太, はるかなるヤマトタケル～写本と講義からみる日本書紀～, 亀山市歴史博物館, 亀山市歴史博物館, 2020年10月3日, 招待
- 遠藤慶太, 日本書紀と穴海—備後の古代交通とヤマトタケル伝承—, ふちゅう歴史フォーラム, オンライン開催, 2020年11月21日, 招待
- 小倉慈司, コメント, 「古代食の総合的復元と疾病との関係解明」シンポジウム, 東京医療保健大学・オンライン, 2020年9月13日, 招待
- 小倉慈司, 旧フランス極東学院日本語資料中の典籍写本調査への期待 (Expectations for the Research on the Manuscripts of EFEO Japanese Book Collection), "The International Conference "Ancient Japanese Book Collection of the Social Sciences Library - Issues and Potential", オンライン, 2020年10月14日, 査読有り, 国際会議, 招待
- 河合佐知子, 『神』に関わる女院の役割について—宣陽門院の例を中心に—, 第52回女院研究会, 東京(オンライン), 2020年9月29日
- 河合佐知子, "Onsen" as a Kaleidoscope: Multifaceted Uses of Japanese Natural Springs Across Time 万華鏡と

としての「温泉」—日本温泉文化史から湯の多様性を考える, 69th Midwest Conference on Asian Affairs, アメリカ合衆国ミシガン州 (オンライン), 2020年11月23~26日, 英語, 国際会議

河合佐知子, Working as a Communications Specialist at the National Institutes for the Humanities and Rekihaku in Japan during the Pandemic (パンデミック下において人文知コミュニケーターとして大学共同利用機関人間文化研究機構・国立歴史民俗博で活動することの意義), The Project for Premodern Japan Studies (PPJS) Fridays Conversations on Premodern Japanese History, ロサンゼルス (オンライン), 2020年12月5日, 英語, 国際会議

河合佐知子, 「多様な研究分野における「ジェンダーの課題」を共に考える共創の場の創出」勉強会報告, 2020年度I-URICフロンティアコロキウム総括シンポジウム, 東京 (オンライン), 2021年1月27日

中村光一, 上野三碑は語る, 筑波大学日本史談話会大会, オンライン, 2021年2月7日, 招待

仁藤敦史, 天平期の疫病と風損—国家による対策と地域—, 静岡県地域史研究会記念シンポジウム, あざれあ男女共同参画センター, 2020年9月22日, 招待

堀裕, 都から陸奥に派遣された官人たちの仕事振り—按察使・陸奥国・鎮守府—, 鎮守府探訪講座2020, 奥州市埋蔵文化財センター, 2020年11月15日, 招待

三上喜孝, 日韓の木簡からみた古代東アジアの医薬文化, 第1回国際学術大会「古代東アジア文字資料研究の現在と未来—韓国・中国・日本出土木簡資料を中心に—」, オンライン, 2020年11月5~7日, 国際会議, 招待

三上喜孝, 古代日本における論語木簡の特質—韓国出土の論語木簡との比較から—, 国際学術大会「東アジア論語の伝播と桂陽山城」, オンライン, 2020年11月26~27日, 国際会議, 招待

三上喜孝, 平泉出土文字資料へのアプローチ(1)饗宴と文字, 平泉学フォーラム, オンライン, 2021年2月7日, 招待

三上喜孝, 観音信仰, 百済から日本へ—『観世音応驗記』を出発点として—, 日韓古代比較宗教史国際シンポジウム, オンライン, 2021年2月28日, 国際会議, 招待

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎小倉 慈司 本館研究部・准教授 宗教史分野 (神祇史) 研究の統括

##### 【研究分担者】

遠藤 慶太	皇學館大学文学部・教授	文化史分野
河合佐知子	本館研究部・特任助教	海外発信・海外研究者育成
川尻 秋生	早稲田大学文学学術院・教授	社会文化史分野
中村 光一	上武大学ビジネス情報学部・教授	政治史・技術史分野
仁藤 敦史	本館研究部・教授	法制史分野
早川 万年	岐阜大学教育学部・教授	本文研究 (祭祀・儀礼分野)
堀 裕	東北大学文学部・教授	宗教史分野 (仏教史)
三上 喜孝	本館研究部・教授	流通経済史分野
山口 えり	広島市立大学国際学部・准教授	宗教史・文化史分野

### (3) 基盤研究 (C)

#### 古代荘園と在地社会についての高度情報化研究 2020~2022年度

(研究代表者 仁藤敦史)

##### 1. 目的

本研究は, 古代荘園と在地社会の実態分析から「日本型律令制」の理念と実態を, 従来の肉眼観察だけによらないGISなどの新たな資料分析手法を積極的に導入することにより明らかにする。具体的には, 初期荘園が「公地公民」を理念とする律令国家の変容から生まれたという通説の修正と, 東大寺領北陸型荘園に片寄った資料的限界の打破を目指す。荘園立券化以前の土地利用状況を出土文字史料などにより明らかにする点も新しい試みである。

本研究の射程は, 在地社会から古代荘園を見直し, 律令制以前からの屯倉に代表される大土地所有と古代荘園との連続性を明らかにし, 延いては「公地公民」を理念とする「日本型律令国家像」の相対化を試みる。条里坪付けごとの情報やその古代景観を明らかにでき, その景観が開発により急速に失われつつある「額田寺伽藍並条里図」や栄山寺文書を中心に分析する。

## 2. 今年度の研究計画

初年度は、まずA研究史整理と課題の確認をおこない、B額田寺伽藍並条里図の非破壊分析(印影と布端を中心に)と麻布の科学的分析、C条里坪付情報集積ソフトの設計開発を開始するとともに、D基本図書の資料収集、E館蔵荘園史料の整理検討を準備作業としておこなう。フィールドワークとしてはI栄山寺周辺予備調査(奈良県五條市)とII額安寺周辺調査(奈良県大和郡山市)、III山形県古代荘園調査(寒河江荘・遊佐荘を中心に)をおこなう。さらに、外部の研究協力者およびゲストスピーカーを集めて歴博での研究会を開催する。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、新型コロナ蔓延による移動の制約により、フィールドワークを実施することができなかった。それ以外の研究は、概ね当初の計画どおりに計画を進めることができた。

まずAの研究史整理は、栄山寺関係の先行研究論文のリスト化をおこない、主要なものを集成した。Bの額田寺伽藍並条里図の非破壊分析と麻布の科学的分析については、12月16日と18日に島津美子氏らの協力を得て、電子顕微鏡による非破壊調査を実施し、西山虎之助氏による模写ですでに確認されていた56個所以外に多くの影印の痕跡が残されていることを確認した。左右両端を超えて国印が捺されていることも確認され、本来はさらに大きな図面である可能性も指摘できた。Cの条里坪付け情報については、坪単位の開発情報の集成をほぼ完了し、坪単位の開発状況を把握するための基礎的作業を完了した。Dの基本図書の収集については、栄山寺関係の図書を古書で数冊購入した。12月18日には外部の研究協力者ととも歴博で研究会を開催し、多くの助言を受けた。また、3月7日には、中世研究者と栄山寺研究会を早稲田大学で開催した。来年度からは歴博共同研究としても研究を開始する予定である。フィールドワークについては、来年度の課題として開催したい。

## 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎仁藤 敦史 本館研究部・教授

### 【研究協力者】

後藤 真 本館研究部・准教授 荘園情報分析  
 三上 喜孝 本館研究部・教授 出土文字分析(古代史)  
 山口 英男 東京大学史料編纂所・教授 荘園絵図分析・文書分析(古代史)  
 鷲森 浩幸 帝塚山大学文学部・教授 荘園調査・文書分析(古代史)  
 鈴木 景二 富山大学人文学部・教授 出土文字分析・荘園調査(古代史)  
 島津 美子 本館研究部・准教授 非破壊分析(保存科学) I

## (4) 基盤研究(C)

日本開国史の再構築—「開国のかたち」をめぐる国際的相克の解明  
 2020～2022年度

(研究代表者 福岡万里子)

### 1. 目的

幕末に徳川政権が結んだ西洋諸国との修好通商条約は、その後世紀転換期に明治政府が条約改正を実現するまで四半世紀以上の間、近代日本の「開国のかたち」を決定づけた。本研究は、この「開国のかたち」が形作られた過程を、様々な「かたち」の候補が構想された中で、西洋列強間の国際的相克と幕府内外の開国方針をめぐるせめぎ合いを経て特定の候補が勝ち残り、施行され、かつ再調整がなされていった過程と捉え、その実態を多言語史料から見直すことで、日本開国史の国際関係史としての再構築を図る。方法的には、当該過程を駆動した西洋側キーパーソンとして、米国初代駐日総領事ハリス、オランダ対日外交顧問シーボルト、同国駐日代表クルチウス等に着目し、彼らの直接・間接の競合的な対日外交を通じて1858/59年の通商開国のあり方が決定され、通商開国後はさらにイギリスやプロイセンなど諸列強が新たに参入する中で再調整がなされていく国際関係の動態を、マルチ・アーカイヴァル・アプローチにより解明していく。

### 2. 今年度の研究計画

・ニューヨーク市立大学所蔵の未刊行のハリス文書中、本研究にとり最も重要度の高いハリスの発信書翰群の翻刻・調査を進め、可能であれば、書翰群を収めるレターブック5冊の解読を終わらせる。やはり未公刊のハリスの受信書翰群についても、重要性の高いものについて、調査を進める。

- ・日本開国史をめぐるハリスの外交を理解するに際して重要な前提となる、来日前のハリスの中国沿海部やシャム（タイ）における活動について、関係史料・文献を調査の上、論文を執筆していく。
- ・ハリスが日米修好通商条約の調印にこぎ着ける前夜における、オランダ駐日代表ドンケル・クルチウスの対日交渉について、史料収集を行う。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は前半に、上述したハリスの発信書翰群を収めるレターブックの解読を集中的に行った。同レターブックは5冊あり、昨年度までに第1冊～4冊の解読を終了していたので、今年度は5冊目の解読を進め、6月末までに最後の頁まで翻刻・分析作業を行い、もってレターブック全5冊の解読が終了した。これは日本開国史をめぐるハリスの動向に関する根本史料となる。

その後、ハリスが来日前に行ったシャム（タイ）との条約交渉について、ハリス文書中の受信書翰群中にある関係史料の解読・調査を進めるとともに、それらのうちの難読史料について、海外の業者に解読を発注し、翻刻データを入手した。

今年度後半は、上記の作業を通じて翻刻が揃った史料群が含むテーマ群のうち、ハリスが来日前に行ったシャムとの条約交渉に焦点を当て、それらの関係史料を調査・吟味し、かつ対シャム条約交渉に関するイギリスの史料や関係文献も収集・調査した。それらの成果に基づき、論文「米使ハリスの1856年対シャム条約交渉―パウリングの経験との比較から」を執筆し、3月までに『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号「近世近代転換期東アジアの外交と通商―海域世界の秩序変動（仮）」の一論文として投稿した。2021年4月現在、査読中である。

今年度はこの他、オランダ国立公文書館のデータベースで、幕末の駐日オランダ代表ドンケル・クルチウスの史料を調査し、1858年、日米修好通商条約の調印前夜におけるクルチウスの発信書翰群を特定し、それらの画像データを入手した。その後それらの解読を海外業者に発注し、翻刻データを入手して、次年度以降、関連調査を開始する準備を整えた。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎福岡万里子 本館研究部・准教授

## (5) 若手研究

### データ駆動型歴史研究のための共用テキストレポジトリ構築 2020～2022年度

（研究代表者 橋本雄太）

#### 1. 目的

本研究の目的は、日本語歴史資料テキストの共用レポジトリ（歴史資料版「青空文庫」）の構築を通じて、歴史資料を対象としたデータ駆動型研究の基盤を確立することである。テキストマイニングやデータ可視化など、機械処理を駆使した歴史研究の遂行には機械可読形式で提供される大量のテキストデータの存在が不可欠である。しかしわが国は歴史資料のデジタルテキスト化について諸外国に大きな遅れを取っている。本研究では、まず①日本語文献資料に特化した軽量マークアップ言語の開発を通じてテキストの構造化記述を支援し、②また人文学資料の国際標準機械可読フォーマットであるTEIとの互換性を確立することで、その学術資源としての利用可能性を担保する。③さらに歴史資料翻刻テキストのユーザー参加型レポジトリを開設し、第一段階としてクラウドソーシングによって得られた650万文字の翻刻テキストを公開する。これによって国内外の研究者が日本語の歴史文献を対象としたデータ駆動型研究に取り組むための環境を整備する。

#### 2. 今年度の研究計画

初年度である本年度は、①共用レポジトリの基本設計と、②これを踏まえた試験版の実装、また③軽量マークアップ言語Kojiの改修にあたった。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

まず①については、本研究で構築を予定する歴史資料のテキスト共用レポジトリについて、技術的要件の整理と必要技術の選定を行った上で、レポジトリが格納するテキストの階層構造やグルーピングなど基本データ構造の設計を実施した。また、共用レポジトリは主にAPIを介して外部プログラムとデータの交換を行うが、これをスムー



ズにおこなうためにOpenAPIを利用したAPIのスキーマ定義をおこなった。

次に②については、①の設計方針に基づきRuby on Railsを用いて共用レポジトリの試作版を構築した。この試作版に、テストデータとして「みんなで翻刻」上で翻刻された災害資料600万字分のデータをインポートした。この試作版は資料のテキストデータの閲覧・編集を可能にするREST APIを提供し、JSONやXMLなど機械可読形式で出力する。ElasticSearchを利用した全文検索や、ユーザー認証による閲覧制限にも対応する。

③については、共用レポジトリの主要データフォーマットとなる予定の軽量マークアップ言語Kojiの改修を実施し、docx, LaTeX, XML, HTML, txtなど各種フォーマットへの変換機能を整備した。これによって、Kojiで書かれた文書のデータとしての可搬性が大きく向上した。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎橋本 雄太 本館研究部・テニュアトラック助教

### 【科研費研究（継続）】

#### (6) 新学術領域研究（領域提案型） 考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明 2018～2022年度 (研究代表者 藤尾慎一郎)

##### 1. 目的

AMS—炭素14年代測定によって相対年代から数値年代への転換が進む高精度な較正暦年代に基づいた弥生時代研究と、DNA解析が急速に進んでいる分子人類学との異分野研究によって、数値年代にもとづくDNAのあり方が復元できる。その成果は、弥生～古墳時代の親族構造や通婚圏、人口増加率などを得るために有益な情報となる。

特に九州北部に分布する弥生時代の甕棺出土人骨から採取したDNAと、同人骨の炭素14年代測定によって得られた死亡年代を比較して、数十年単位の高精度な時間軸に基づいたDNAを導きだし、墓に葬られた人びとの親族構造を解明する。

また、現代日本人のゲノムに12%程度みられる縄文由来のDNAの意味を考えると、古墳時代以降も列島外からのDNAが加わる必要性が想定されているため、日本列島へ人類が渡ってくる経路地である朝鮮半島南部から出土する三国時代を中心とした古人骨のDNAと年代・同位体比分析を行って、古墳時代人骨と比較する。

##### 2. 今年度の調査

今年度は、2020年7月17日に鹿児島女子短期大学において新学術領域研究B01班第5回考古班会議、2021年1月16～17日に国立歴史民俗博物館において第6回考古班会議を開催した。コロナ禍とあって調査に支障を生じたが、2020年9月に鳥取県内の古墳出土人骨、2021年3月に、弥生時代前期と後期の人骨のサンプリング調査を行うことができたので、来年度、炭素14年代測定とDNA分析を行う予定である。さらに2019年度に調査を行った熊本大学医学部に所蔵してある人骨の内、縄文人骨の年代学的調査報告を、国立歴史民俗博物館研究報告に投稿した。

##### 3. 今年度の研究経過及び成果

2020年度はコロナ禍にあったため、新たな調査・サンプリングの機会は少なかったが、昨年度までに分析していた調査成果をA02班と合同で、論文と研究ノート、調査報告という形で『国立歴史民俗博物館研究報告』に投稿し、2019年度の調査(1)を2021年3月31日に第228集として刊行した。また現在、2020年度調査の査読が終了し、現在、修正中なので、2021年9月までの刊行を目指している。また、日本考古学協会、鹿児島県考古学会、九州考古学会においても研究発表を行い、そのうち、『鹿児島考古』第50号に、鹿児島県内の古人骨の調査報告を投稿し、3月31日に刊行した。

2020年度の調査でわかったことは主に以下の3点である。

1. 紀元前8世紀の韓半島系の墓である支石墓に葬られていた熟年女性は、核ゲノム分析の結果、西日本の縄文人と同じことがわかった。
2. 従来、渡来系弥生人とされてきた人びとは、縄文系の狩猟採集民と韓半島系の水田稲作民との混血によって生まれたと考えられてきた。しかし昨年度の調査で明らかになった約6300年前の韓半島新石器時代人の核

ゲノムが渡来系弥生人とほぼ同じであったことを考えると、渡来系弥生人と、韓半島新石器時代人の系譜を引く韓半島青銅器時代人を、核ゲノムでは区別できないことがわかった。同時に縄文人が混血の対象とした人びとは、中国など大陸の新石器時代人がもつDNAであった可能性も含めて考える必要性が出てきた。

3. 紀元前6世紀の愛知県朝日遺跡で見つかった水田稲作民のミトコンドリアDNAは、渡来系弥生人であることがわかった。韓半島から愛知県まで渡来人が直接、行っている可能性は低いので、弥生時代が始まってから400年ほどで渡来系弥生人が伊勢湾沿岸地域まで進出していた可能性と同時に、九州から伊勢湾沿岸地域までの列島西半分には、かなりの渡来系弥生人が存在していた可能性も出てきた。さらに朝日遺跡から数十km離れた渥美半島にはほぼ同時期に縄文のミトコンドリアDNAをもつ狩猟採集民がいたことを考えると、両者が混血した人びとが存在した可能性もあることがわかった。
4. 紀元後3世紀の前方後円墳である高松茶白山古墳に葬られていた3人のDNA分析の結果、古墳に葬られた人びとの親族関係は、これまで歯冠計測で言われてきた1親等のキョウダイよりもやや広い、2親等から3親等の範囲にまで及んでいた可能性がでてきた。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

##### 【研究分担者】

木下 尚子	熊本大学・名誉教授	奄美・沖縄出土人骨の考古学的解析
清家 章	岡山大学・教授	古墳時代人骨の考古学的解析
◎藤尾慎一郎	本館研究部・教授	研究総括、弥生時代人骨の考古学的解析
山田 康弘	東京都立大学・教授	縄文時代人骨の考古学的解析
濱田 竜彦	鳥取県地域づくり推進部文化財局鳥取弥生の王国推進課青谷上寺地遺跡整備室係長	中国地方の先史時代人骨

##### 【連携研究協力者】

坂本 稔	本館研究部・教授	炭素14年代測定
瀧上 舞	本館研究部・プロジェクト研究員	食性分析・年代測定

#### 5. 刊行物

##### 1 『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集, 2021年3月31日に刊行。

- 00 木下尚子(論文)「貝殻集積からみた先史時代の貝交易—2018年度の炭素14年代測定結果をもとに—」 pp.213-246.  
以下, A02班と合同のレポート
- 01 藤尾・木下・坂本稔・瀧上舞・篠田謙一「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明—2019年度の調査(1)—」 pp.247-266.
- 02 藤尾・坂本・瀧上「愛知県清須市朝日遺跡出土弥生人骨の年代学的調査」 pp.267-276.
- 03 篠田・神澤秀明・角田恒雄・安達登「愛知県清須市朝日遺跡出土弥生人骨のミトコンドリアDNA分析」 pp.277-286.
- 04 篠田・神澤・角田・安達・清家「大阪府堺市野々井二本木山古墳出土人骨のミトコンドリアDNA分析」 pp.287-294.
- 05 神澤・角田・安達・篠田「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨の核DNA分析」 pp.295-308.
- 06 濱田竜彦・坂本「鳥取県米子市古市宮ノ谷山遺跡出土弥生後期土器に伴うモモ核の年代学的調査(2)」 pp.309-319.
- 07 濱田・坂本・瀧上「鳥根県出雲市猪目洞窟遺跡出土人骨の年代学的調査」 pp.321-327.
- 08 神澤・角田・安達・篠田・斎藤成也「鳥根県出雲市猪目洞窟遺跡出土人骨の核DNA分析」 pp.329-340.
- 09 清家章・坂本・瀧上「岡山県倉敷市中津貝塚出土縄文人骨の年代学的調査」 pp.341-344.
- 10 清家・坂本・瀧上「岡山県内古墳出土人骨の年代学的調査」 pp.345-360.
- 11 清家・坂本・瀧上「香川県高松市高松茶白山古墳第I主体部E地区出土古墳人骨の年代学的調査」 pp.361-268.
- 12 神澤・角田・安達・篠田「香川県高松市高松茶白山古墳出土古墳前期人骨の核DNA分析」 pp.369-374.
- 13 瀧上・坂本・藤尾「佐賀県唐津市大友遺跡第5・6次調査出土弥生人骨の補正年代について」 pp.375-384.
- 14 神澤・角田・安達・篠田「佐賀県唐津市大友遺跡第5次調査出土弥生人骨の核DNA分析」 pp.385-394.
- 15 竹中正巳・坂本・瀧上「鹿児島県内出土縄文人骨の年代学的調査」 pp.395-401.

- 16 篠田・神澤・安達・角田・竹中「鹿児島県内出土縄文人骨のミトコンドリアDNA分析」pp.403-410.
- 17 竹中・坂本・瀧上「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨の年代学的調査」pp.411-416.
- 18 篠田・神澤・角田・安達・竹中「南九州古墳時代人骨のミトコンドリアDNA分析」pp.417-426.
- 19 竹中・坂本・瀧上「鹿児島県南種子町広田遺跡出土人骨の年代学的調査」pp.427-432.
- 20 篠田・神澤・角田・安達・竹中「鹿児島県南種子町広田遺跡出土人骨のミトコンドリアDNA分析」pp.433-440.
- 21 竹中・瀧上・坂本「鹿児島県徳之島所在遺跡出土人骨の年代学的調査」pp.441-448.
- 22 篠田・神澤・角田・安達・竹中「鹿児島県徳之島所在遺跡出土人骨のミトコンドリアDNA分析」pp.449-458.
- 23 竹中・坂本・瀧上「鹿児島県奄美群島所在遺跡出土人骨の年代学的調査」pp.459-464. 2021年3月17日
- 24 篠田・神澤・角田・安達・清家・李在煥・朴天秀「韓国高靈池山洞44号墳出土人骨のミトコンドリアDNA分析」pp.465-471.
- 2 日本考古学協会第86回研究発表要旨 藤尾・木下尚子・清家章・濱田竜彦・坂本稔・瀧川舞・篠田謙一「新学術領域研究「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明—2019年度活動報告—」」pp.24-25. 東京
- 3 令和2年度九州考古学会総会研究発表要旨 藤尾・坂本・瀧上・篠田・神澤・角田・宮本一夫「佐賀県大友遺跡8号支石墓出土人骨のDNA調査」26p, 2020年11月28日, オンライン. 福岡
- 4 『鹿児島考古』第50号 藤尾・木下・坂本・瀧上・篠田・神澤・角田・竹中「九州南部～奄美群島出土人骨の年代学的調査とDNA分析—新学術領域研究「ヤポネシアゲノム」」pp.37-44. 鹿児島
- 5 瀧上・坂本・藤尾「福岡市博多区博多遺跡群第203次調査出土弥生中期人骨の年代学的調査について」『博多170—博多遺跡群第203次調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1405集, pp.316-332, 2021年3月31日.

## 6. 一般向け活動

NHKカルチャー ヤマト王権・古代史講座 特別編『日本列島人の起源と歴史—考古学・DNA・言語学からのアプローチ』2020年4月～2021年3月までの第4日曜日開講（オンライン）

- |                                  |                  |
|----------------------------------|------------------|
| 第1回 考古学・DNA・言語学からみた最新の研究成果       | 藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館） |
| 第2回 DNA概説                        | 篠田謙一（国立科学博物館）    |
| 第3回 旧石器・縄文人骨のゲノム研究が意味すること        | 山田康弘（東京都立大学）     |
| 第4回 弥生人骨のゲノム研究が意味すること            | 藤尾（歴博）           |
| 第5回 農耕とともにやって来た動物たち              | 鈴木仁（北海道大学）       |
| 第6回 日本人のルーツと病気とのかかわり             | 長田直樹（北海道大学）      |
| 第7回 日本語Bのルーツ 大陸との関係              | 遠藤光暁（青山学院大学）     |
| 第8回 方言からみた日本語のルーツ                | 木部暢子（国立国語研究所）    |
| 第9回 現代人のDNAからみたヤポネシア人（日本列島人）のルーツ | 斎藤成也（国立遺伝学研究所）   |
| 第10回 先史琉球と日本の古代文化                | 木下尚子（熊本大学）       |
| 第11回 古墳時代人骨のゲノム研究が意味すること         | 清家章（岡山大学）        |
| 第12回 ヤマト王権と古代国家の成立               | 松木武彦（国立歴史民俗博物館）  |

## (7) 新学術領域研究領域提案

### 集団の複合化と戦争

2019～2023年度

（研究代表者 松木武彦）

#### 1. 目的

本研究の目的は、ヒト固有の「入れ子状に階層化する多数の集団が複合した巨大な社会」が生み出されたメカニズムとプロセスを、戦争という事象を通じて解明することである。戦争には、武力による征服によって集団間の統合を促す外的・物理的側面だけでなく、戦争という状況の演出によって集団内のアイデンティティを強化し、その操作を通じて強化された権力によって急速な階層化が進むという内的・認知的側面とがある。本研究はとくに後者に力点を置き、戦争に関わる人工物（考古資料）の時系列化とその地域比較によって、ヒト社会における戦争と社会複合化のプロセスを復元する。さらに、ヒトの認知と身体がどのようにして戦争という現象を生み、それを媒

介に、どのような認知と進化のメカニズムが、集団の複合化と、それによるヒト特有の巨大社会を実現したのかを明らかにする。

## 2. 今年度の研究計画

上記のうち、2020年度の目的は、第1に「戦争に関わる人工物（考古資料）の時系列化」を完成させ、地域比較の基盤を得ることである。具体的には、「戦争に関わる人工物（考古資料）」の体系化（エヴィデンス表の作成）を最終的に完了し、それに基づいて、班員がそれぞれ分担する地域を対象に「戦争に関わる人工物（考古資料）の時系列化」を提示することである（「班全体の研究概要 ②班員の研究活動」として後述）。第2に、それらを地域間で相互比較しつつ、「社会の複合化と戦争」のプロセスとメカニズムを普遍的に解明することである。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

### ① 研究会

2021年度は、A03班「集団の複合化と戦争」に関連する公募研究として、「偏狭な利他主義仮説の実証的検討」（研究代表者：北海道大学文学研究科教授 高橋伸幸）、「マヤ文明黎明期の複合社会の形成と戦争に関する研究」（研究代表者：茨城大学人文社会科学部教授 青山和夫、「古代マヤ王族の日常実践から解明する戦争と階層化の関係性」（研究代表者：京都外国語大学研究員 塚本 憲一郎）が加わった。

これらの公募研究の研究代表者や関係者とA03班のメンバーを合同させた形で、6回の研究会を実施した。その目的は、班員相互の研究に関わる視点や情報の共有を図ること、および「社会の複合化と戦争」のプロセスとメカニズムを普遍的に解明することにつながる視座や論点を明確化していくことである。なお、COVID-19の感染拡大に伴い、下記の6回の研究会は、いずれもzoomを使用した遠隔会議としての開催を余儀なくされた。

### ② 資料の収集と分析

COVID-19の感染拡大に伴うさまざまな規制によって、北アメリカ、中央アメリカ（メキシコ・グアテマラ・ホンジュラス）、オセアニア（トンガ・ミクロネシア・ツバル・クック諸島）におけるデータの取得が平均約30%（日本国内で取得できるデータ）に限られ、後述の「エヴィデンスデータ表」の完成と、それによる相互比較を実地で行うには至っていない。ただし、上述した6回の研究会によって、相互比較のための視座や論点を明確化する作業が先行して進んだ。2021年度は、先行して進んだ視座や論点の明確化を、逆に「エヴィデンスデータ表」にフィードバックして、その作成を効率的に行うための材料が得られたことになる。

「エヴィデンスデータ表」では、「戦争に関わる人工物（考古資料）」の体系化（エヴィデンス表の作成）最終的に完了し、62の項目を設定した。これらについて、日本列島中央部および南部・北部、北アメリカ、中央アメリカ、南アメリカおよび南太平洋の各地域において、それぞれの担当者が有無や消長を調査して「エヴィデンス表」の作成を開始した。なお、この作成は、戦争に関する上記の62項目のみならず、A01・A02班がそれぞれ管轄するモニュメントおよびアートに関する諸項目も併せて、事実上は各担当者が作業地域を設定して進めた。その詳細は次のとおりである。

- 日本列島中央部：関東～近畿（寺前直人）、瀬戸内（松木武彦）、九州（橋本達也）、東北（藤澤敦）
- 北アメリカ：北アメリカ大陸中東部のカホキア、マウンドヴィルなど（佐々木憲一）
- 中央アメリカ：マヤ、ペテン・チアパス・ユカタン諸地域および周縁地域（市川彰）
- 南アメリカ：インカ、ワリ、およびペルー北高地とペルー北海岸を結ぶヘケテベケ川流域（渡部森哉）
- オセアニア：トンガ（比嘉夏子）、トンガ・ツバル・クック諸島（長岡拓也）

ただし実際には、各地域は、残されたデータの性質や密度も異なるので、上記の体系化項目にそのままインプットすると、地域ごとに粗密の差や通底的分析の不都合が生じる可能性がある。そのための対処として、日本列島の古代境界領域やインカでは文字記録（藤沢・渡部）、マヤについては碑文（市川）、トンガについては人類学的資料（比嘉、上記の体系化のうち「データ群Ⅳ（戦争に関わる非考古学的資料）」に相当）を補足的に扱い、全体として地域ごとの粗密のないデータの抽出と整理が行えるようにした。

### ③ 研究成果（代表者のみ）

#### 論文

<査読あり>

松木武彦2021. 日本列島先史・原史時代における戦いと戦争のプロセス. 年報人類学集報12:

松木武彦2021. 特集「新しい戦争の考古学」によせて. 年報人類学集報12: 掲載予定

<査読なし>

松木武彦. 2020.5.1グローバル・ヒストリーと日本考古学 弥生・古墳時代の世界史的位置. 季刊考古学151: 101-

105

- 松木武彦. 2020.12. 吉備と出雲の前方後方墳. 柳本照男さん古稀記念論集—忘年之交の考古学—. 65-74
- 松木武彦. 2021.2. 「内なる戦争」: 表象でとらえる考古学. 科学91 (2): 182-185
- 松木武彦・近藤康久. 2020.9.30. 岡山平野における居住高度の通時的推移と気候変動—弥生・古墳時代を対象に—. 中塚毅・若林邦彦・樋上昇 (編). 気候変動から読みなおす日本史3 先史・古代の気候と社会変化. 臨川書店. 131-148
- Matsugi, Takehiko. 2021.3.31. Warfare, art, and monuments in the process of social complexity within the prehistoric Japanese archipelago. (in) Matsumoto, N., Sugiyama, S., and C. Garcia-Des Lauriers (eds.). Landscape, Monuments, Arts, and Rituals: Out of Eurasia in Bio-Cultural Perspectives: 112-122
- 小林謙一・藤尾慎一郎・松木武彦. 2020.9.30. 先史時代 (縄文・弥生・古墳時代) の年代と時代区分. 中塚武・若林邦彦・樋上昇 (編). 気候変動から読みなおす日本史3 先史・古代の気候と社会変化. 臨川書店. 35-59
- その他
- 松木武彦. 2020.9.30. コラム 日本列島の国家形成論. 中塚武・若林邦彦・樋上昇 (編). 気候変動から読みなおす日本史3 先史・古代の気候と社会変化. 臨川書店. 149-153
- 松木武彦. 2020.9.30. 書評 谷澤亜里 著『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』. 考古学研究67 (2): 61-64
- 松木武彦. 2021.1.30. 時代全体の概観. 中塚武・鎌谷かおる・佐野雅規・伊藤啓介・對馬あかね (編). 気候変動から読みなおす日本史1 新しい気候観と日本史の新たな可能性. 臨川書店. 55-61
- 松木武彦. 2021.1.30. 集落立地の変動と社会構造. 中塚武・鎌谷かおる・佐野雅規・伊藤啓介・對馬あかね (編). 気候変動から読みなおす日本史1 新しい気候観と日本史の新たな可能性. 臨川書店. 91-95

#### 新聞記事など

- 松木武彦. 書評 サラ・パーク著『宇宙考古学の冒険』. 日本経済新聞2020.11.6
- 松木武彦. 書評 設楽博己 著『顔の考古学 異形の精神史』. 日本経済新聞2021.2.20

#### アウトリーチ活動

- NHK総合 「ミステリアス古墳スペシャル」(初回放映: 2021年9月22日) 制作関与・監修・出演
- NHK総合 英雄たちの選択スペシャル「古代人のこころを発掘せよ!!」(初回放映: 2021年1月3日) 制作関与・監修・出演
- NHK教育 ETV特集「誕生 ヤマト王権～いま前方後円墳が語り出す～」(初回放映: 2021年3月27日) 制作関与・監修・出演

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

- ◎松木 武彦 本館研究部・教授
- 市川 彰 名古屋大学高等研究院 (文)・特任助教
- 佐々木憲一 明治大学文学部・教授
- 寺前 直人 駒澤大学文学部・教授
- 比嘉 夏子 北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科・助教
- 藤澤 敦 東北大学学術資源研究公開センター・教授
- 渡部 森哉 南山大学人文学部・教授

#### 【研究協力者 (国内)】

- 長岡 拓也 NPO法人パシフィカ・ルネサンス代表理事
- 橋本 達也 鹿児島大学総合研究博物館・教授

### (8) 基盤研究(A)

「研究に真に使える」歴史資料情報基盤の構築  
—データ持続性研究と人文情報学の実践—  
2017～2020年度  
(研究代表者 後藤 真)

#### 1. 目的

本研究の目的は歴史資料情報基盤を「研究で真に使える」ものにするべく、研究を行うものである。情報基盤としてRDF・IIIF・TEIという3つの標準を用い、目録・画像・テキストそれぞれについて、国際標準でかつ実用

耐えうるシステム構築を行う。歴史学研究および関連研究に資することから始まり、広く過去を扱った教育などに展開し、大学などだけではなく各地域の博物館や在野の歴史研究者でも活用可能とする。技術として標準化されたものを重点的に用いるのは、歴史研究の方法論を反映し、かつ複数機関で相互運用し、教育などへのアウトプットまでを実際に行うという、実践のための研究であることが本研究の最大の意義である。また、歴博の資料を国際標準規格で公開することで、進んでいない博物館資料の公開へのモデルケースともなる。

実際には目録・画像・テキストが複雑にリンクを構成し、必要な情報に容易にアクセスできるようにするものである。また、これらの情報にはすべてURIを付し、研究資源として論文等の成果リポジトリとの連携を行う。

## 2. 今年度の研究計画

資料そのものの特徴分析や日本前近代資料の特徴へとの可能性を拓きつつ検討を行う。デジタルデータのしくみと実際の方法論の差異といった、「そもそもうまくいかない点」にこそ、資料分析の本質があると考え、情報基盤から資料の本質分析へとつなげる。あわせて、研究チームによる「機関を超えた情報提供」を可能にする研究を行う。複数機関における、複数のサーバにこれまで蓄積されたデータを「一体的なモノ」として効果的に表現できるのかなどを確認する。国際標準規格上の機能についても、歴史教材等での活用を介し、より実践で使える機能構築を検討する。

延喜式等のデータを活用した目録と画像・テキストの総合的なデータ構築を可能にするためのシステム構築を検討する。これにより、テキスト・目録・画像の3つの枠組みを構築することが可能になり、歴史資料データを研究に高度に使うための大枠が完成する。あわせて、昨年度の重要な成果であるGetty研究所との連携を活かし、特にLinked Dataを中心とする目録情報の国際的な共通化等を行う仕組みを確保する。

また、歴史学の基礎的な手法等を見直すことにより、なぜデータ活用がうまくいかないのかなどの分析を行うことで、より利用可能なデータの構築と蓄積を行うことを目指す。研究計画の後半に入り、より歴史資料研究に利用可能なデータのあり方を総合的に研究するとともに、実際の多様なデータの構築を行う。とりわけ、コンテンツ情報の利用と、横断型検索の課題等も含めて広く検討を進めた。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

IIIFにかかわるデジタル・アーカイブシステムを構築し、公開した。前年度までに構築していたIIIFのシステムは相互運用性等を確保するという観点からの成果を上げていた。しかし、一方で人文系の研究者など、情報技術の専門ではないユーザからの閲覧という観点からは、そもそもIIIFのビューアのみでは決して快適ではないという課題があった。IIIFとRDFおよびTEIの連携という観点において、まずはこれを解決すべきと考え、閲覧を容易にするとともに、目録に加え画像にもランディングページを作成することで、両者の連携についても容易なものとした。また、歴史資料の活用の際に課題となっている、データ粒度の問題の一つも、この成果により道筋をつけることができた。この一点ごとの「デジタルアーカイブ」と、関連したシステムの組み合わせにより、さまざまなニーズの研究者に対応するための、データプラットフォーム構築のためのシステム設計への着想も、あわせて得ることができた。

メタデータの検討に関しても、既存の有力なデジタルアーカイブシステムの検討をベースにした、集中的な検証を実施した。融通の利くデータ構造と、特に情報系の研究者にとって利活用可能なしくみのバランスを考え、あらたなしくみの可能性について検討を行った。具体的にはSchema.orgのしくみを基本とし、これ以外のメタデータを組み合わせるといった手法を検討することが、現実的な解決方法であると考えた。

また、TEIについても検証の終了を終え、実装への準備を整えた。これらの研究成果については、DH2019などの国際会議で発表を行い、国内外へと広く公開した。

## 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

- ◎後藤 真 本館研究部・准教授
- 岡田 義広 九州大学附属図書館・教授
- 坂本 稔 本館研究部・教授
- 関野 樹 国際日本文化研究センター・教授
- 高田 良宏 金沢大学総合メディア基盤センター・准教授
- 山田 太造 東京大学史料編纂所・助教
- 内田 順子 本館研究部・准教授

(9) 基盤研究 (A)  
 高精度同位体比分析装置を用いた古代日本における青銅器原料の産地  
 と採鉱状況の研究  
 2017～2020年度  
 (研究代表者 齋藤 努)

1. 目的

わが国は、古墳時代後期から古代にかけて、海外の関与を受けつつも日本独自の国家体制が成立していき、やがて変容・崩壊の過程をたどる。その影響は多方面の文化や技術に反映され、青銅器原料の産地や採鉱技術にも及んでいる。

本研究では、青銅器原料の産地を推定する主な手段であった鉛の同位体比分析に加え、きわめて高精度な新規分析装置を使用して、銅や、鉱山周辺地質のストロンチウムやネオジムの同位体比分析も行う。この手法はマルチアイソトープ法とよばれており、それにより、(1) 古墳時代後期における青銅器の日本産原料の開始時期とその地域を解明すること、(2) 古代において青銅器原料を供給した鉱山を推定しその推移を明らかにすること、(3) 古代に採掘された銅の鉱石種別を判定し日本における採鉱の状況を究明すること、以上の三課題に取り組むことを目的とする。

2. 今年度の研究計画

これまでの鉛同位体比研究から、古代の青銅製品には、山口県内から採取された原料が主として使用されていたことがわかっている。古代にさかのぼる複数の鉱山から採掘される鉱石の鉛同位体比は、歴博が2014年以前に所有していた比較的精度の低い装置では識別が困難であったが、現有の高精度の分析装置によってみわけられるようになり、長登鉱山産の原料が主に使われていると推定された。

山口県の周防鑄銭司跡から、羽口・るつぼのほか、長年大宝5点が出土したので、その鉛同位体比を分析し、原料の産地を推定する。経験上、羽口やるつぼの付着熔融物は鉛の濃度が低いため、歴博が従来行ってきた高周波加熱分離法では鉛同位体比分析ができなかった。しかし、抽出クロマトグラフィー用レジンを使用することで、多量の試料を効率よく前処理できるようになったので、これらの資料にも適用することにした。

周防鑄銭司跡からは、承和昌宝の破片も出土したため、X線CT撮影と鉛同位体比分析を実施する。周防鑄銭司以前に銭貨を鑄造し、和同開珎の破片や羽口・るつぼなどが出土している長門鑄銭所の新規資料も分析を開始する。

3. 今年度の研究経過及び成果

昨年度中に試料採取した、周防鑄銭司跡出土の羽口・るつぼ付着熔融物と長年大宝について、鉛同位体比分析を行った。同県内鉱山の鉱石の数値と比較し、長登鉱山産原料が使用されていると推定された。また、X線CTの観察結果や銭貨の数値に誤差の範囲を超えるばらつきがみられることから、5点の長年大宝は、同時に鑄造されたのではなく、鑄損じ銭が、重なった状態で出土したものと推測された。

長登鉱山産の鉱石と、周防鑄銭司跡出土の長年大宝のうち1点および炉内熔融物とでは、鉛同位体比にわずかな差異があり、鉱床の中での数値のばらつきや、鉱石以外の要因が加わっている可能性が考えられた。これを検証するため、同鉱山の周辺地質資料や羽口・るつぼなどのストロンチウム同位体比測定を行った。

周防鑄銭司跡出土承和昌宝と長門鑄銭所出土資料の分析については、COVID-19の影響により、研究会や資料の受け渡しができなくなったため、年度内の実施には至らなかった。また、2020年度中の研究会と、今岡名誉教授が歴博に滞在して実験する計画も中止にした。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

成瀬 正和 東北芸術工科大学芸術学部・客員教授  
 田中 晋作 山口大学人文学部・教授  
 今岡 照喜 山口大学理学部・名誉教授  
 亀田 修一 岡山理科大学生物地球学部・教授  
 高橋 照彦 大阪大学文学研究科・教授  
 古尾谷知浩 名古屋大学人文学研究科・教授  
 澤田 秀実 作陽短期大学音楽学科・准教授  
 竹内 亮 京都府立大学・特任准教授

坂本 稔 本館研究部・教授  
 高田 貫太 本館研究部・准教授  
 荒木 和憲 本館研究部・准教授  
 林部 均 本館研究部・教授  
 ◎齋藤 努 本館研究部・教授

(10) 基盤研究 (A)  
 琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家  
 2018～2021年度  
 (研究代表者 村木二郎)

1. 目的

世界史上の大航海時代より以前に、早くも14世紀代から東アジア海域世界では活発な交易がおこなわれていた。それを牽引した琉球は、単なる受動的な中継貿易国家ではなく、諸外国と複雑な外交交渉をおこない、積極的な交易活動を展開した海洋国家であった。その活動過程で、言語も習俗も異なる宮古・八重山や奄美に侵攻し、在地社会を大きく変化させた。その痕跡は、遺跡や遺物、伝承に残るのみである。本研究では、これまでほとんど注目されてこなかった琉球の帝國的側面に新たに視点を据え、中世後半の東アジア海域世界の多様かつ流動的な様態を捉え直す。その際、これまで独擅場であった文献史学による研究に目を配りながらも、集落構造や流通、技術に着目し、考古学、民俗学、分析化学等のさまざまな手法により、新たな歴史像を探る。そして、歴史的一断面から設定された現在の国境の必然性を問うことで、「国家」とは何かを歴史学の立場から提言するための実証的素材を整える。

2. 今年度の研究計画

本研究は、琉球の周辺地域から古琉球史を見つめなおすことを目的とする。そのためには、周辺地域の資料を渉猟する必要がある。これまでの当該研究は、主として文献史料をもとに描かれてきたが、既存の文献史料を素材とする限り、従来の研究から脱却することは難しい。というのも、奄美・先島を中心とした琉球周辺地域には同時代の文献史料がほとんど存在しないため、後世の琉球王府による編纂物に頼るしかなく、結果として琉球王府史観によって周辺地域を捉えざるを得ないのである。しかし、それらの地域には遺跡があり、遺物がある。これらの考古資料を整理、分析することで、新たな素材を増やし、周辺地域独自の文化を明らかにする基礎作業が重要となる。第3年度である2020年度は、沖縄本島うるま市勝連城跡出土陶磁器調査を完了するほか、宮古島市与那覇遺跡、与論町与論城跡出土陶磁器調査を実施して、データの蓄積を図る。手法としては、特定の遺跡（遺構）出土の貿易陶磁器を、同一分類基準で全点カウントする。沖縄独自の分類基準ではなく、全国的に通用する基準を用いることで、当該地域以外の情報とも比較可能とする。また、八重山・宮古地域の代表的な中世集落遺跡として宮古島市上比屋山遺跡をとりあげ、遺跡の年代確定のためのトレンチ調査を実施する。

また、年度末には国立歴史民俗博物館で新特集展示「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」をおこない研究成果を一般に公開する。展示図録は科研調査の成果と位置づけ、メンバーの論考を適宜掲載する。

3. 今年度の研究経過及び成果

9月8日～9日 調査 於：長島町歴史民俗資料館

千竈家文書複製品制作のための調査、撮影

9月12日～15日 調査 於：石垣島、波照間島

フルスト原遺跡、ビロースク遺跡出土陶磁器調査

波照間島マシユク村跡遺跡、ミシユク村跡遺跡踏査

石垣島内遠見番所踏査

10月1日～4日 調査 於：喜界町教育委員会、与論町教育委員会

喜界島城久遺跡群ウフ遺跡、手久津久遺跡群中増遺跡出土陶磁器調査

与論島与論城跡出土陶磁器調査

10月19日～23日 調査 於：那覇市教育委員会、うるま市教育委員会、沖縄県立博物館・美術館、沖縄県立埋蔵文化財センター

銘苅原遺跡、渡地村跡、勝連城跡、御物城跡、ミシユク村跡遺跡、マシユク村跡遺跡、上村遺跡、慶田崎遺跡、

与那原遺跡、新里村遺跡、首里城跡二階殿地区出土陶磁器調査



11月5日～7日 調査 於：宮古島市教育委員会

ミヌズマ遺跡, 住屋遺跡出土陶磁器調査

3月14日～15日 研究会 於：国立歴史民俗博物館

新特集展示「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」見学, 講評

展示図録執筆分担(村木二郎編著, 池田榮史「夜光貝」ほか, 黒嶋敏「古見島の港」ほか, 小出麻友美「八重山における仏教」, 鈴木康之「喜界島と石鍋」, 関周一「朝鮮人漂流民のみた八重山・宮古」, 中島圭一「太田行頼奉書」, 渡辺美季「康熙帝勅諭琉球国王尚貞宛」ほか, 荒木和憲「古琉球の王権」ほか, 齋藤努「琉球王国の銭貨」, 田中大喜「千竈氏」ほか, 松田睦彦「八重山のツカサとオン」, 池谷初恵「八重山・宮古の貿易陶磁器」, 岩元康成「奄美のグスク」ほか, 小野正敏「ハナスク」, 久貝弥嗣「与那覇はら軍」ほか, 佐々木健策「ミシュク村とマシュク村」, 山本正昭「最北端の大規模グスク—与論城—」)

ギャラリー討論

3月22日 研究会 於：国立歴史民俗博物館

ギャラリー討論

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

##### 【研究分担者】

池田 榮史 琉球大学国際地域創造学部・教授  
 黒嶋 敏 東京大学史料編纂所・准教授  
 小出麻友美 千葉県立中央博物館・研究員  
 鈴木 康之 県立広島大学人間文化学部・教授  
 関 周一 宮崎大学教育文化学部・教授  
 中島 圭一 慶應義塾大学文学部・教授  
 渡辺 美季 東京大学大学院総合文化研究科・准教授  
 荒木 和憲 本館研究部・准教授  
 齋藤 努 本館研究部・教授  
 田中 大喜 本館研究部・准教授  
 松田 睦彦 本館研究部・准教授  
 ◎村木 二郎 本館研究部・准教授

##### 【連携研究者】

岡本 弘道 県立広島大学人間文化学部・准教授

##### 【研究協力者】

池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会・文化財調査員  
 岩元 康成 始良市教育委員会・主事  
 小野 正敏 本館・名誉教授  
 久貝 弥嗣 宮古島市教育委員会・係長  
 佐々木健策 小田原市文化財課・係長  
 山本 正昭 沖縄県立博物館・美術館・主任学芸員

## (11) 基盤研究 (A)

### 単年輪<sup>14</sup>C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明 2018～2021年度

(研究代表者 坂本 稔)

#### 1. 目的

放射性炭素年代法は、炭素14 (<sup>14</sup>C) の半減期に基づく年代測定法であり、考古学や地球惑星科学などの諸分野で広く利用されている。測定値(炭素14濃度)から数値年代を得るにはIntCalなどの「較正曲線」を用いるが、そのデータは5年分解能であり欧米産樹木から得られたものである。較正曲線の改善は年代測定の精度・確度の向上に直結することから、全世界的に研究が進められている。申請者らはその過程で、日本産樹木の炭素14濃度がIntCalとずれる年代があることを見出した。国産試料の年代測定において、このようなずれは年代値の誤差を生むことにつながり、より正確な年代決定のための較正曲線が必要である。本研究は人類の歴史に重要な過去2000年

間について、IntCalの解像度を上回る1年分解能の較正曲線の確立を目的とする。このような較正曲線が得られれば、年代測定の精度が画期的に改善するだけでなく、 $^{14}\text{C}$ を指標とした太陽物理などの自然科学分野にも影響を与えうる。

## 2. 今年度の研究計画

国立歴史民俗博物館年代実験室における試料調製の体制が整い、年輪セルロースの抽出が効率用に行えるようになった。引き続き、日本産樹木年輪の単年輪炭素14年代測定を進める。海外の研究機関との連携も進め、効率的な測定の実施を目指す。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

2020年8月、新しい較正曲線となるIntCal20（北半球陸域）、SHCal20（南半球陸域）、Marine20（表層海水域）が公開された。IntCal20には、歴博で蓄積してきた日本産樹木年輪の $^{14}\text{C}$ 測定のデータが反映された。先のIntCal13には陸域資料として水月湖の年縞堆積物のデータが採用されていたが、日本産樹木年輪の採用は初めてのことである。ただし、これまでのデータは5年輪を1試料とした測定が主であり、本研究で推進してきた単年輪のデータは間に合わなかった。他方、IntCal20には世界各地の単年輪のデータが多く採用されていて、単年輪 $^{14}\text{C}$ 測定は世界的な潮流になりつつある。

今年度は、伊勢神宮神域スギ（AD1600～1672：単年，AD1673～1801：隔年）、伊那山中ヒノキ（AD798～970：隔年）、鹿屋市白水B遺跡出土センダン（1053～921BC：隔年）の $^{14}\text{C}$ 測定を実施した。また、韓国地質調査所に依頼して、釜山広域市古村里遺跡出土ノグルミ柱（AD81～168）の測定を実施した。

伊勢神宮スギは既に5年輪を1試料とした測定を実施していたが、測定結果に若干の疑問がありIntCal20への採用は見送られた。今回の測定結果は十分に整合的で、次期IntCalへの採用を目指す。

8世紀や10世紀は、Miyake Eventとも呼ばれるAD775の宇宙線強度変動を検出・検証する目的で単年輪 $^{14}\text{C}$ 測定が密に行われ、その結果はIntCal20にも採用されているが、伊那ヒノキの範囲となる9世紀は単年輪 $^{14}\text{C}$ 測定が欠落している。本資料はこの時期を補うデータとして有用であるが、IntCal20よりも若干古い炭素14年代を示す傾向にある。

白水Bセンダンは昨年度に続く単年輪 $^{14}\text{C}$ 測定だが、その際に見られたIntCal13（当時）よりも若干新しい炭素14年代を示す傾向は再現されなかった。樹木年輪の再処理・再測定による検証が必要である。

1世紀から3世紀は、日本産樹木年輪のデータが欧米産樹木よりも若干古い炭素14年代を示し、むしろ南半球産樹木に近い挙動を示すことが知られ、IntCal20に採用された結果、その形状が見直された。弥生後期から古墳初頭に至る時期の較正年代が妥当になると期待される一方、日本産樹木年輪の示す挙動が世界標準となってしまったことに懸念が生じた。その検証を目的として、日本列島にも近接する韓国産樹木年輪の単年輪 $^{14}\text{C}$ 測定を実施したが、古村里ノグルミは日本産樹木年輪を反映したIntCal20よりも従来のIntCal13に近い挙動を示した。この結果は深刻に受け止める必要があり、最終年度は至急、同時期の韓国産ならびに日本産樹木年輪の単年輪 $^{14}\text{C}$ 測定を実施する予定である。

本研究における昨年度までの成果は、年代研究にかかるこれまでの共同研究の成果とともに、歴博研究叢書『樹木・木材と年代研究』（朝倉書店）に掲載した。また文化財科学会第37回大会において、IntCal20の紹介とともに昨年度実施した専修寺ヒノキ（AD1158～1436）の単年輪 $^{14}\text{C}$ 測定の結果を報告した。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

- ◎坂本 稔 本館研究部・教授
- 箱崎 真隆 本館研究部・プロジェクト研究員
- 木村 勝彦 福島大学・共生システム理工学部・教授
- 三宅 美沙 名古屋大学・宇宙地球環境研究所・准教授
- 中尾 七重 山形大学・理学部・研究員
- 尾崎 大真 東京大学・総合研究博物館・特任研究員

(12) 基盤研究 (B)  
 中世日本の東アジア交流史に関する史料の集成的研究と研究資源化  
 2016～2020年度  
 (研究代表者 荒木和憲)

1. 目的

本研究の目的は、中世日本の分権的な社会で分散的に生成された「東アジア交流史関係史料」を網羅的に収集・分析し、史料論的側面から、中世日本の東アジア交流史研究の総合化を図ることである。具体的な手順としては、収集した史料の基本情報と本文テキストをデータ化し、これに個々の史料の生成・授受等に関わるメタデータを付加する。そして、ユーザーが任意の切り口から史料を検索することができるファセット検索システムを構築し、これに上記のデータを投入することで、中世社会における「東アジア交流史関係史料」の生成・授受等のあり方を表現するとともに、ユーザーが高度で有意な情報を自在に引き出せるようにする。当該システムは2016年度内に構築し、2017年度以降に研究成果の速報的な公開を図る。最終年度に研究成果報告書として『中世日本 東アジア交流史関係史料集成 (稿)』を作成し、将来的な史料集成の実現に向けた第一歩とする。

2. 今年度の研究計画

昨年度と同様、代表者・研究分担者が所属する4機関で研究補助作業従事者を雇用し、その補助を受けながら、「東アジア交流史関係史料」の検出、基本情報・本文テキスト・メタデータの作成・入力を進める。代表者は全体の進捗状況を管理し、研究分担者から提供されたデータの集約と整合化の作業を行う。今年度は最終年度にあたるため、研究成果報告書として史料集を発行する。あわせて、全てのテキストデータをファセット検索システムで公開する。

3. 今年度の研究経過及び成果

榎本班・伊藤班は活字化された禅宗関係史料、須田班は未活字の禅宗関係史料(東京大学史料編纂所謄写本)、荒木班は未着手の文書・記録・典籍類にもとづき、「東アジア交流史関係史料」の検出・データ化作業を進めた。昨年度末までにデータ化したのは約7,000件であったが、最終的には約15,700件にまで増加した。

研究成果報告書として、『中世日本 東アジア交流史史料集成 (稿)』全3冊を発行した。仕様はA4版、各頁36字×32行×2段組とした。第1冊記録編は614頁、第2冊文書編は644頁、第3冊典籍編・銘文編は522頁となり、全体で1,780頁となった。紙媒体の報告書は100部印刷し、全国の主要な研究機関・図書館・博物館等、ならびに東アジア交流史を専門とする研究者に配付した。PDF版はresearchmap (<https://researchmap.jp/araki-k>) 経由で希望者に配付することとした。

テキストデータは、「総合資料学情報基盤システム」(khirin, <https://khirin-ld.rekihaku.ac.jp/>) において公開し、ファセット検索を可能とした。これに関しては、後藤班を中心として検索・表示機能の改善作業を行った。また、専用の検索サイト (<https://www.chuseitaigaisi.jp>) を構築・公開した。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

伊藤 幸司 九州大学大学院比較社会文化研究院・教授  
 榎本 渉 国際日本文化研究センター・准教授  
 須田 牧子 東京大学史料編纂所・助教  
 後藤 真 本館研究部・准教授  
 ◎荒木 和憲 本館研究部・准教授

(13) 基盤研究 (B)  
 17～19世紀の在外日本コレクション形成に関する基礎的研究  
 2017～2020年度  
 (研究代表者 日高 薫)

1. 目的

17世紀以降のヨーロッパで形成された日本コレクションは、未知の世界である東方へ向けた眼差しを反映する異文化コレクションのひとつとして位置づけられるが、その歴史的展開は未だ全体的には把握されていない。本研究

では、王侯貴族による啓蒙主義的な性格のコレクションから近代的なコレクションへの変化が認められる19世紀の状況とくに注目し、具体的な事例の比較検討を通じて、各時代における日本コレクション形成の動向をたどる。博覧会や博物館展示との関連、貿易や産業振興といった実利的な側面にも留意しつつ、ジャポニスム前夜の日本美術受容の実態を解明し、海外における異文化コレクションをめぐる文化の総体的理解の一助としたい。

なお、本研究は、歴博が推進する人間文化研究機構・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用「ヨーロッパにおける19世紀日本関連在外資料調査研究・活用—日本文化発信にむけた国際連携のモデル構築—」と連動しつつ、19世紀のコレクション研究に新たな理論的裏付けを与える基礎的な研究を推進するものである。

## 2. 今年度の研究計画

基幹研究プロジェクトにおいては、ウィーン世界博物館所蔵のハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクションの総合的調査を中心に、シーボルトの二人の息子、アレクサンダーとハインリッヒに関する「もの資料」および文献資料の調査を進めている。本年度は、可能な範囲内で引き続き現地調査をすすめるとともに、オーストリアにおいて開催中の国際連携展示の図録およびハインリッヒに関する論文集を刊行し、19世紀の在外日本関係資料に関わる最新の研究成果を広く発信することとした。

- ① 海外コレクションの調査（関連分野のメンバーによる） ドイツ国内の小シーボルト・コレクションの調査、ロイトリンゲン大学所蔵ベルツ・コレクション染織資料の調査、ウィーン応用美術博物館などの調査を進める。
- ② 国際連携企画展示の開催と図録刊行 ミュンヘン五大陸博物館およびウィーン世界博物館において開催中のシーボルト・コレクションに関する企画展示を引き続き開催し、展示図録を刊行する。
- ③ 上記企画展示に関連した論文集を刊行する。
- ⑤ 関連資料の収集と整理 万国博覧会および日本コレクション関連の資料（書籍・論文・原史料・写真等）を収集する。

## 3. 今年度の研究経過および成果

- ① 予定していた海外調査は、新型コロナウイルス感染拡大によりすべて実施不能となった。
- ② 国際連携企画展示「Collecting Japan. Philipp Franz von Siebolds Vision vom Fernen Osten」（邦題：「日本を集める—シーボルトが紹介した遠い東の国」）の開催  
会場：ミュンヘン五大陸博物館 会期：2019年10月11日～2020年4月26日予定、3月14日から臨時休館、5月12日に再開し9月13日まで延長 主催：ミュンヘン五大陸博物館、国立歴史民俗博物館 プログラム・パートナー：ミュンヘン・フォルクスホッフシュー、ミュンヘン独日協会 メディア・パートナー：歴史雑誌「ゲシヒテ」 協力：バイエルン州科学芸術省、五大陸博物館友の会  
当初予定していた会期は、2019年10月11日～2020年4月26日であったが、3月14日から臨時休館。5月12日に再開し、9月13日まで会期を延長して13,647名の入場者を得た。
- ③ 日墺友好150周年企画Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold展  
（邦題：「明治の日本—ハインリッヒ・フォン・シーボルトの収集品から」）の開催  
会場：ウィーン世界博物館 会期：2020年2月13日～5月5日予定、3月11日より臨時休館、7月2日に再開し8月11日まで延長 主催：ウィーン世界博物館、国立歴史民俗博物館、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト、公立はこだて未来大学 協力：世界博物館友の会  
当初予定していた展覧会会期は、2020年2月13日～5月5日であったが、3月11日より臨時休館。7月2日に再開し、8月11日まで会期を延長して21,280名の入場者を得た。当初計画していた教育プログラムや日本メディアの取材等は中止となったが、オーストリア国内のみならずスロヴァキアのラジオ等にとりあげられるなど、反響を呼んだ。  
また、展示図録『Japan zur Meiji-Zeit. Die Sammlung Heinrich von Siebold』（ドイツ語／日本語・ただし日本語は資料解説のみ）を、プロジェクトメンバーを中心とする日欧の研究者17名の執筆により刊行した。
- ④ ジュネーヴ市立アリアナ美術館における展示支援事業  
Chrysanthèmes, dragons et samouraïs. La céramique japonaise du Musée Ariana展  
（「菊・龍・サムライ—アリアナ美術館所蔵の日本陶磁」展）への協力  
2020年12月11日～2022年1月9日（予定）。当初予定していた2020年10月からの会期が一旦延期されたが、12月11日に変更して開幕。その後2021年1月の臨時休館を経て再開、当初の会期を延長して開催中である。
- ⑤ ウィーン世界博物館において開催予定であった国際シンポジウム「International Symposium: More

Insights into the Heinrich von Siebold Collection (邦題：国際シンポジウム「ハインリッヒ・フォン・シーボルトのコレクション—さらなる洞察」)の内容によるハインリッヒ・フォン・シーボルト蒐集資料に関する論文集『異文化を伝えた人々Ⅱ ハインリッヒ・フォン・シーボルトの蒐集資料』を出版した。

- ⑥ 昨年度ミュンヘンで開催予定であったが延期していた国際シンポジウムを、形を変えて、オンラインで開催した。(国際シンポジウム「海外で《日本》を展示すること—海外のコンテクストと日本のコンテクスト」“Exhibiting ‘Japan’ Overseas: Overseas Contexts and Japan’s Contexts”)

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

荒川 正明	学習院大学・文学部	青柳 正俊	本館研究部・プロジェクト研究員
大久保純一	本館研究部・教授	澤田 和人	本館研究部・准教授
島津 美子	本館研究部・准教授	◎日高 薫	本館研究部・教授
福岡万里子	本館研究部・准教授		

### (14) 基盤研究 (B) 朝鮮海出漁の歴史とその文化的影響の研究 —イワシをめぐる韓国の民俗変化 2017～2020年度 (研究代表者 松田睦彦)

#### 1. 目的

本研究では、明治中期から第二次大戦終結まで日本人漁民によって行われた朝鮮海出漁を、日本の文化の朝鮮半島への移入の歴史ととらえ、その経緯と現代の韓国の生活文化に残る影響を明らかにする。具体的には、魚油や肥料、煮干の原料として、経済・軍事・生活などの面で重要な位置を占め、朝鮮半島の生活文化に変革をもたらしたイワシをめぐる出漁を取り上げ、Ⅰ. イワシを追った朝鮮海出漁の背景と実態、Ⅱ. 朝鮮海出漁が朝鮮半島の人々の生活に与えた影響について、文献資料や現地で採集された記録・語りから明らかにする。本研究は、イワシをめぐる韓国の現在の生活文化の観察を起点にすることで、「植民地収奪論」や「植民地近代化論」に回収されない、Ⅲ. 日本と東アジア諸国との新たな生活文化研究の枠組みを提示する。

#### 2. 今年度の研究計画

本年度は研究の最終年度であり、これまでの調査研究のとりまとめ、および、今後、本研究をさらに発展させるための準備研究をおこなう。とりまとめへ向けた研究としては、これまで、研究分担者が担当してきた研究についての補足調査をおこない、その成果を報告、論文等にまとめる作業をおこなう。一方、本研究の発展のための準備研究としては、調査地を中国や台湾に広げ、本研究で開拓した手法の活用の可能性を探る。

##### 【韓国】

- ①韓国国内の水協(日本の漁協に相当)等に残される戦前の日本人漁民にかかわる資料の所在確認および整理。②トングミンベ(韓国漁船)への日本技術の導入にかかわる調査研究。③煮干しの流通および利用にかかわる調査。

##### 【日本】

- ①各地に残る朝鮮海出漁にかかわる資料の所在確認および整理。②カタクチイワシ漁法の地域的差異にかかわる調査研究。

##### 【中国】

- ①青島等の漁船への日本技術の導入にかかわる調査研究。②中国における煮干し利用にかかわる調査。

##### 【台湾】

- ①近代における日本からの漁撈技術導入にかかわる調査研究。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

新型コロナウイルスの感染拡大が国内外での調査活動に大きな支障をきたすなか、今年度計画していた調査のうち、【日本】②の「カタクチイワシ漁法の地域差異にかかわる調査研究」のみ、長崎県壱岐市勝本町で10月に実施することができた。他の調査については、次年度へと先送りされた。また、対面での研究会の開催が困難ななか、1月22日にはリモートで研究会を開催し、これまでの調査研究の整理と共有をおこなった。

なお、本研究の成果は、国立歴史民俗博物館と韓国国立民俗博物館との共催による国際企画展示「昆布とミヨク

「一潮香るくらしの日韓比較文化誌」(会期：2020年3月17日～5月17日)の一部として発表予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。ただし、展示図録は刊行され、本研究の成果が反映された。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

磯本 宏紀 徳島県立博物館・学芸係長  
川島 秀一 東北大学災害科学国際研究所・シニア研究員  
昆 政明 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・特任教授  
島立 理子 千葉県立中央博物館・主任上席研究員  
◎松田 睦彦 本館研究部・准教授

### (15) 基盤研究 (B) 官衙機構の動態からみた古代日本における境域の特質 2018～2020年度 (研究代表者 林部 均)

#### 1. 目的

古代日本は、その境界領域(境域)である東(東北地方)と西(九州地方)に居住する人々を「蝦夷」,「隼人」などと呼称し、特別なシステムで統治した。国家の境域が地勢・政治・経済の上でも、列島中央とは異なる特別な地域と認識されていたからである。また、近年、境域におかれた官衙が政治的な拠点であるとともに、国家の外の地域との交流(外交・交易・軍事)拠点であったことが明らかとなっている。そこで、本研究では、このような官衙の交流拠点としての機能を具体的かつ実証的に分析し、古代日本の境域のもつ特質や、この地域が古代日本の歴史的展開に与えた影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、遺跡や遺構・遺物の分析により、交流拠点としての官衙の実態把握と、その機能の復元、出土文字資料の再検討などから地域社会の復元をおこなう。そして、境域という新しい視点からみた、古代史像の構築を目指す。

#### 2. 今年度の研究計画

本年度は、本研究の最終年度となる。昨年度に引き続き、古代日本の境界領域(境域)における官衙遺跡の最新の発掘調査にもとづき、遺跡を構成する建物や空間の機能、その変遷を復元し、その動態を明らかにする。その際、官衙機構がもつ交流拠点としての機能である外交、交易、軍事をとくに重視して、それを反映する具体的な遺跡・遺構・遺物・史料の把握に努める。

本年度はこれまでの研究実績を踏まえて下記の三つの視点に絞って研究を実施する。

- ①秋田平野(秋田城)、横手盆地(雄勝城)をはじめとした東北地方北部と北海道との交流。
- ②大宰府と西海道諸国との交流。
- ③古代に南島と呼ばれた地域、とくに奄美群島を中心とした地域の特徴。

①では、北海道の石狩低地帯を中心として出土する須恵器に着目して、その動態を把握し、秋田城、雄勝城の変遷等と対比する。さらに、北海道に流入した古代国家にかかわる遺構・遺物を調査する。また、北海道から、これらの地域にもたらされたモノ資料について文献史料などを中心に分析する。そして、秋田城、雄勝城など、官衙機構のもつ交流拠点としての特質を明らかにする。

②では、大宰府で出土する西海道諸国から持ち込まれたモノ資料、大宰府から西海道の各地に持ち出されたモノ資料、影響を与えたことについて分析し、交流拠点としての大宰府の特質を明らかにする。

③は、奄美群島地域がもつ境界領域としての特徴を把握するため、中世までを視野に入れつつ、九州本島からの搬入品、地元、奄美群島でつくられる土器や貝製品などを検討して、日本歴史の中で奄美群島がもつ特徴を把握する。とくに境界が時代によって動くということこそが境界領域のもつ特徴であることを具体的な資料を使って明らかにしたい。

これらの三つの視点からの分析を総括して、官衙機構のもつ交流という機能に着目して、日本古代における境界領域のもつ特徴を明らかにして、境界からあらためて日本の歴史を見直し、研究総括としたい。その成果は論文等で公開する。本年度は、フィールド調査1回、研究を総括する研究会を1回開催する。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は本研究の最終年度となるため、研究計画で述べた①～③に視点をおきつつ、古代日本の境界領域(境域)

における官衙等の最新の発掘調査の成果を精査し、官衙機構のもつ交流拠点としての機能である外交・交易・軍事に着目して、遺跡・遺構・遺物の分析をおこない、研究総括を目指した。

①の北の境域、ならびにその北の地域との交流では、秋田城跡の最新の発掘調査にもとづき、その機能を検討した。奈良時代後半から平安時代前半にかけて北上盆地を中心として分布する赤彩された土師器甕に注目し、その分布と消長について調査した。東北地方北部において地域の特徴を発現した資料は少ないので、境域を考えるうえで重要な資料である。また、石狩低地帯での擦文文化の成立を考えるため、東北地方北部、とくに岩手県の土師器について調査した。この成果をもとに、石狩低地帯の擦文文化の土師器と比較検討を計画したが、実施直前になって、新型コロナウイルス拡大のため、調査を延期せざるをえなかった。さらに、北海道におけるオホーツク文化、擦文文化の歴史的展開を把握するため、遺跡・遺物を調査した。これらの調査成果をもとに、総括の研究会の開催も計画したが、これについても延期せざるをえなかった。

②・③の南の境域については、主に報告書等を使って資料収集につとめた。西海道諸国から大宰府に搬入されたモノ資料、大宰府の影響のもと西海道の各地にもたらされたモノ資料の把握は、本研究では完結しなかったので、今後も継続して研究を進めたい。また、奄美・沖縄地域の調査についても、新型コロナウイルス拡大のため、現地調査等が十分におこなえず、課題、問題点の把握にとどまった。これについても、今後、課題としたい。

なお、本年度は、春からの新型コロナウイルス拡大にともなう、緊急事態宣言の発出と行動の制限等により、資料調査の制限、研究会の開催の延期等、当初の研究計画のとりの遂行に困難をきたすことになった。そのため、①にかかわって、擦文文化の成立を検討するための石狩低地帯の調査や、北海道大学で計画していた総括の研究会を延期したため、研究経費の繰り越しをおこない、2021年度に残された調査と研究会を実施することとした。資料調査等の開催は下記のとおり。

7月9日～12日	資料調査	斜里町立知床博物館、網走市立郷土博物館、モヨロ貝塚館、北海道立北方民族博物館、北見市とこ遺跡の森、東京大学北方実験施設陳列館
7月16日	資料調査	秋田市立秋田城跡歴史資料館
7月29日～8月1日	資料調査	紋別市立博物館、オホーツクミュージアムえさし、目梨泊遺跡、オンコロマナイ遺跡、稚内市樺太記念館、稚内市北方記念館
8月7日～8日	資料調査	八戸市博物館、阿光坊古墳群、八戸市立図書館、是川縄文館
9月2日～5日	資料調査	別海町加賀家文書館・根室市歴史と自然の資料館、標津町歴史民俗資料館、羅臼郷土資料館、斜里町立知床博物館、北海道立北方民族博物館
10月1日～4日	資料調査	旭川市博物館、旭川市兵村記念館、北鎮記念館、上川神社、川村カ子トアイヌ記念館、士別市立博物館、苫前町郷土資料館、留萌市海のふるさと館
10月15日	資料調査	東北歴史博物館、多賀城市埋蔵文化財センター
10月21日～25日	資料調査	釧路市立博物館、釧路市埋蔵文化財センター、標茶博物館、北斗遺跡、厚岸郷土館、えりも町郷土資料館、帯広百年記念館
11月12日～13日	資料調査	米沢市上杉博物館、山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館、高島町郷土資料館、金原古墳
12月18日	資料調査	北上市立博物館
2月10日～11日	資料調査	福島県立博物館
2月28日～3月3日	資料調査	首里城、沖縄県立博物館、今帰仁グスク、那覇市立歴史博物館、浦添ようどれ、浦添市立美術館、玉陵、識名園、斎場御嶽、沖縄県立公文書館

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎林部 均 本館研究部・教授

##### 【研究分担者】

三上 喜孝 本館研究部・教授

高田 貫太 本館研究部・教授

菱田 哲郎 京都府立大学文学部

栗畑 光博 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター（都城市教育委員会）

坂上 康俊 九州大学人文科学研究院

蓑島 栄紀 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

鈴木 琢也 北海道博物館

## 【研究協力者】

伊藤 武士 秋田市秋田城跡歴史資料館  
 島田 祐悦 横手市教育委員会  
 吉野 武 宮城県教育庁文化財課  
 杉原 敏之 福岡県教育庁教育総務部文化財保護課  
 津曲 大祐 西都市教育委員会  
 永山 修一 ラ・サール高等学校  
 近沢 恒典 都城市教育委員会

(16) 基盤研究(B)  
 文化の主体的継承のための民俗誌の構築—マルチメディアの活用と協働作業を通じて  
 2018～2022年度  
 (研究代表者 川村清志)

## 1. 目的

本研究の目的は、日本の地域社会が失いつつある生活文化の諸相を持続的に継承し、活用するための基盤となる、マルチメディアを用いた民俗誌を作成することにある。

この研究の意義として、①人類学、民俗学の民俗誌記述における理論的、倫理的な課題の克服、②現代的メディア状況に対応した民俗誌実践の試み、③地域社会への持続的な文化支援という側面を持っている。民俗誌は、対象とする社会の生活文化を全体的に記録することを目的としている。本研究では、日本の地域社会において研究者と現地の人びとの対話と協働を通して、多様な価値観と視点を内包した、自己表象としての民俗誌を共に創出する。文字情報はもちろん、画像や動画を用いてネット上での公開も視野に入れた民俗誌であり、人びと自身が主体的に選択し、積極的に継承、活用しようとする文化についての更新可能な—メディアを通じて文化実践を上書できる—記録の構築を目指す。

## 2. 今年度の研究計画

2020年度は、これまでのサーベイ調査と研究分担者からの示唆を検討し、各調査地における協働調査の具体的な活動に入っていく。以前から調査をしていた地域では、先行的に現地との協働作業が行われたことで、その成果の一端を継続して示しつつある。今年度は、これらの先行地域での成果を基礎としながら、他地域においても同様のコラボレーション体制を構築しながら具体的な調査活動を継続していきたい。

まず、先行的な調査地として石川県輪島市において、これまでの調査を基礎として当該地域で行われる夏祭りのフォトエスノグラフィー『石川県輪島市皆月山王祭 祭日編』のための調査と現地での協働作業を継続していく。『祭日編』では文字通り祭りの当日に関するフォトエスノグラフィーの作成を、地元の青年会とそのOBとの協働作業によって遂行する。さらに過疎化による地域の空洞化が進む今日の状況を活写するために、地域を離れた青年会員たちの映像民俗誌の調査を彼らの協力のもとに実施する。同じく先行的な地域である宮城県七ヶ浜町では、地域の婦人会や東日本大震災以後のNPO活動に従事していた人たちとの協働作業のもとに、震災以後の文化復興に関するビジュアル民俗誌の制作を進める。

また、昨年から本格的に調査を開始した宮城県気仙沼市については、地域の文化として表象される獅子舞と鹿踊りに注目しつつ、それらの文化財化に尽力したキーパーソンとの協働作業のもとにサステナブルな文化継承のあり方について、夏から秋の調査を予定している。同様に沖縄県宮古島でも、地域の伝統的な祭祀組織の危機的状況に際して、積極的な提言を行い、情報発信を行っているキーパーソンとの協働作業のもとに、研究者のポジショナリティを活かした文化支援のあり方を模索していく。さらに兵庫県明石市については、秋から冬にかけて、現地と研究者を仲介するコラボレーターの存在に注目し、その社会的文化的な特質をインタビューと映像記録にまとめていく方向で、調査を継続していく。

なお宮古島に関しては研究分担者の内田順子が、鹿児島県屋久島については柴崎茂光が、各々の調査経験を活かしつつ、協働作業による民俗誌の調査活動に従事する。また、同県奄美地方については、岡田浩樹がデジタルデバイスを用いた広域にわたる調査実践を継続する予定である。



### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、日本だけでなく全世界を席卷したコロナ禍のために、予定していたフィールドワークと映像撮影の多くが実施できなかった。次年度も予断を許さない状況にあるが、可能な限り各調査地における協働調査を実施する方向で計画を立てていく。以前から調査をしていた地域では、先行的に現地との協働作業が行われたことで、その成果の一端を継続して示しつつある。

まず、調査地である石川県輪島市において夏祭りのフォトエスノグラフィー『石川県輪島市皆月山王祭 祭日編』を完成させた。今後はこのフォトエスノグラフィーをもとに、地元で報告会を行うとともに関連する展示を行いたいと考える。また、過疎化による地域の空洞化が進む今日的状況を活写するために、地域を離れた青年会員たちの映像民俗誌の調査を彼らとの協力をもとに実施する。同じく先行的な地域である宮城県七ヶ浜町では、地域の婦人会や東日本大震災以後のNPO活動に従事していた人たちとの協働作業のもとに震災以後の文化復興に関する映像民俗誌の制作を進めた。また、これまでのフィールドワークの記録と震災以後の営みについてのインタビューを、ブックレットとしてまとめる準備作業を遂行した。

宮城県気仙沼市については、地域の文化として表象される虎舞と鹿踊りに注目しつつ、それらの文化財化に尽力したキーパーソンとの協働作業のもとにサステナブルな文化継承のあり方についての調査の端緒についた。同様に沖縄県宮古島でも、地域の伝統的な祭祀組織の危機的状況に際して、積極的な提言を行い、情報発信を行っているキーパーソンとの協働作業のもとに、研究者のポジショナリティを活かした文化支援のあり方を模索した。ただし実際に調査を行うことはできなかったため、これまで撮影した映像資料の整理作業に従事した。また、兵庫県明石市についても、実地での調査が十分にできなかったため、これまでの聞き取り資料や映像資料のアーカイブ化に務めた。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

- ◎川村 清志 本館研究部・准教授
- 岡田 浩樹 神戸大学・国際文化学研究所・教授
- 内田 順子 本館研究部・教授

## (17) 基盤研究（B）

### 古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開

2019～2022年度

（研究代表者 三上喜孝）

#### 1. 目的

本研究課題は、日本列島と朝鮮半島の漢字文化の展開と変容の実態を、石碑や墓誌、鐘銘や印章などの金石文を素材に考察することを目的とする。本研究課題が対象とする古代の日本列島や朝鮮半島は、中国の漢字文化が受容され、それがさらに地域社会の隅々まで浸透していく時代であった。漢字は、官僚や豪族による行政文書の作成という政治利用だけでなく、仏教・儒教などの思想や儀礼の広まりにおいても大きな役割を果たした。こうした実態を知る手がかりとしては、石や金属器に刻まれた金石文が重要な資料となるが、これまで金石文を分析する手法が韓国と日本で共有されていなかったため、その比較研究が難しかった。そこで本研究課題では、古代日本と朝鮮の金石文の比較研究の手法を開発し、さらには漢字文化とそれに付随する思想や儀礼が東アジアの各地域社会にどのように浸透していったか、その実態を金石文を通じて解明することを主眼とする。

#### 2. 今年度の研究計画

調査カードを作成し、対象となる時期（6～11世紀）の日本と朝鮮半島の金石文についてこれまでの積文や研究を集成する。

韓国において、資料調査を行う。とくに、韓国の国立中央博物館や国立慶州博物館をはじめとする博物館所蔵の6～11世紀の金石文のうち、とくに問題となる金石文について可能な限り実見調査を行う。調査の際には韓国の研究協力者にも同行してもらい、金石文解読や調査手法の共有化をはかる。

国内（国立歴史民俗博物館や東京大学史料編纂所）で研究会を複数回開催し、積文の検討や日韓金石文資料の比較検討、さらには研究発表を行い、研究分担者の間で意見交換を行う。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、韓国における資料調査を行うことができなかった。その代わりに、オンラインによる国際学術会議への参加、国際研究集会の実施等を行った。

#### 【研究経過】

- ・韓国・慶北大学校人文学院HK+事業団 第1回国際学術大会「古代東アジア文字資料研究の現在と未来—韓国・中国・日本出土木簡資料を中心に—」2020年11月5日（木）～11月7日（土）、韓国・国立慶北大学校へのオンライン参加（稲田奈津子・三上喜孝）
- ・韓国・桂陽山城博物館、慶北大学校HK+事業団、韓国木簡学会主催国際学術大会「東アジア論語の伝播と桂陽山城」2020年11月26日（木）～11月27日（金）、韓国・仁川広域市・桂陽山城博物館教育室へのオンライン参加（橋本繁、三上喜孝）
- ・東北学院大学アジア流域文化研究所・中国社会科学院考古研究所主催オンライン国際シンポジウム「中国都城考古の最前線1—漢魏洛陽城・鄴城の考古最新知見および日韓古代都城の発掘と研究—」2020年12月19日（土）～12月20日（日）、東北学院大学アジア流域文化研究所へのオンライン参加（堀裕、三上喜孝）
- ・慶北大学校人文学院HK+事業団第2回国際学術大会「木簡を通してみた古代東アジアの物資流通と管理」2021年2月26日へのオンライン参加（橋本繁、三上喜孝）
- ・日韓古代比較宗教史国際シンポジウム、2021年2月28日（日）、東北大学へのオンライン参加（堀裕、三上喜孝）
- ・国際研究集会「中国・韓国における古代金石文研究の最前線」2021年3月18日 13時～17時の主催（オンライン開催）、参加者：23名

第1報告：王海燕（中国・浙江大学）「浙江省の買地券」

…浙江省出土の買地券14例（+補足3例）について紹介しつつ、買地券の性格や変化を論じ、日本・韓国の事例との比較研究への展望を示す。

第2報告：李東柱（韓国・国立慶北大学人文学院）「新羅の文書行政と印章」

…限られた新羅の印章資料（現物23点、捺印されたもの3点、文献史料上の関連記録2件）を網羅的に紹介・検討する。文字印と記号印がセット関係にあることや、文書行政の進展の中で官印が頒布・利用された可能性を論じる。

#### 【研究成果】

今年度も昨年度に引き続き、韓国での資料調査については、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、やむなく実施を断念せざるを得なかった。代わりに、オンラインによる国際学術会議への参加・発表や国際研究集会の実施を積極的に行った。

資料収集については、韓国の古代～高麗前期までの金石文を中心に、基礎的なデータの収集と入力につとめた。今年度の研究業績は、以下の通りである。

#### 【書籍】

（分担執筆）

- ・上田信編『侠の歴史』東洋編下、清水書院、2020年11月（植田喜兵成智：分担執筆「金庾信 新羅の三国統一における最大の功臣」26-41頁）

（共著）

- ・神野志隆光・金沢英之・福田武史・三上喜孝『新釈全訳 日本書紀 上巻（巻第一～巻第七）』講談社、2021年3月、610頁、ISBN978-4-06-515359-8

#### 【論文】

- ・赤羽目 匡由「『類聚國史』에 실린 이른바「渤海沿革記事」원재료의 수집자에 대하여」（이인재 편『경계를 넘어서는 고구려·발해사 연구』혜안, 2020年10月）pp.287-317
- ・赤羽目 匡由「渤海の中央官制と地方制度」（鈴木靖民・清水信行編『渤海の古城と国際交流』勉誠出版、2021年2月、pp.43-61
- ・稲田奈津子（羅亮訳、劉安志校）「入殮・下葬儀礼復原的考察—以吐鲁番出土随葬衣物疏为中心」武汉大学中国三至九世紀研究所編『魏晋南北朝隋唐史資料』41、上海古籍出版社、査読有、235～257頁、2020年5月
- ・稲田奈津子「殯をめぐる覚書」古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度—律令制・史料・儀式—』同成社、査読無、2～23頁、2021年3月
- ・植田喜兵成智「『内臣之番』으로서의 百濟-高句麗遺民-武周～玄宗 開元 年間 유민의 양상과 그 변화-」（日本語訳：「『内臣之番』としての百濟・高句麗遺民—武周～玄宗開元年間の遺民の様相とその変化」）李仁在編『경계를 넘어서는 고구려·발해사 연구』혜안, 2020年10月、217-251頁、査読なし

- ・橋本繁（研究協力者）「月城塚子新出土木簡と新羅外位」『木簡と文字』24, 2020年6月, 227～250頁, 査読有
- ・橋本繁「古代朝鮮の出土文字史料と「東アジア文化圏」」『唐代史研究』23, 2020年8月, 41～57頁, 査読無
- ・橋本繁「月池（雁鴨池）出土木簡の研究動向および内容検討」『韓国古代史研究』100, 2020年10月, 223～265頁, 査読有
- ・畑中彩子「正倉院文書」佐藤信監修・新古代史の会編『テーマで学ぶ日本古代史 社会史料編』吉川弘文館, 2020年6月, 199～209頁, 査読無
- ・堀裕「王宮からみた仏教の受容と展開—七世紀から九世紀を中心に—」（佐藤文子・上島享編『日本宗教史4 宗教の受容と交流』法蔵館, 2020.11, p12-40）
- ・三上喜孝「日本出土の古代木簡—古代地域社会における農業経営と仏教活動—」『木簡と文字』24, 2020年6月, 347～356頁。査読有。（韓国語）
- ・三上喜孝「韓国出土木簡にみえる海産物とその加工品」『国立歴史民俗博物館研究報告』221, 2020年10月, 123～139頁, 査読有。
- ・三上喜孝「古代日本論語木簡の特質—韓半島出土論語木簡の比較を通して—」『木簡と文字』25, 2020年12月, 173～189頁。査読有。（韓国語）
- ・三上喜孝「韓国出土の文書木簡～「牒」木簡と「前白」木簡を中心に～」『国立歴史民俗博物館研究報告』224, 2021年3月, 149～159頁, ISSN0286-7400, 査読有。
- ・三上喜孝「平泉出土文字資料へのアプローチ（1）饗宴と文字」『平泉学研究年報』創刊号, 2021年3月, 査読無。

## 【学会発表等】

- ・稲田奈津子「東アジア儀礼研究の新視角—「物品目録」の検討から—」慶北大学校人文学術院HK+事業団 第1回国際学術大会「古代東アジア文字資料研究の現在と未来—韓国・中国・日本出土木簡資料を中心に—」（2020年11月5～7日 慶北大学校人文韓国振興館学術会議室Ⅱ & オンライン）
- ・植田喜兵成智「近年の高句麗遺民墓誌に関する研究動向」第5回金毓黻と東北アジア史研究会, 口頭発表, 於オンライン, 2020年9月27日
- ・植田喜兵成智「東アジアにおける則天文字の使用と受容の状況—中代・下代新羅文字資料に対する分析を中心に—」中国文化大学東亜学国際学術論壇「漢字文化於東亜地区的伝播及受納的動態」部会, 口頭発表, 於オンライン, 国際会議, 2020年11月10日
- ・植田喜兵成智「日本學界의 『翰苑』 研究 動向과 課題—7世紀 資料로서 活用하기 위한 試論—」（「日本學界の『翰苑』研究の動向と課題—7世紀資料として活用するための試論—」）學術會議「日本 소재 唐代類書, 『翰苑』蕃夷部の 종합적 검토」(學術會議「日本所在唐代類書, 『翰苑』蕃夷部の総合的検討」), 口頭発表, 於オンライン, 国際会議, 2020年12月28日, 朝鮮語
- ・植田喜兵成智「在唐高句麗遺民の祖先叙述類型とその変化」朝鮮史研究会関東部会1月例会, 口頭発表, 於オンライン, 2021年1月23日
- ・橋本繁「雁鴨池出土木簡の研究動向および検討」韓国古代史研究会・国立慶州文化財研究所主催シンポジウム『統一新羅の宮苑池, 東宮と月池の調査と研究—回顧と展望』2020年7月17日
- ・橋本繁「新羅文書木簡」国立慶州博物館主催シンポジウム『統一新羅文字の世界』2020年10月30日
- ・橋本繁「中古期新羅地方社会の文字使用と疎通」第6回世界人文学フォーラム, 2020年11月20日
- ・橋本繁「韓国出土論語木簡の原形復元」韓国木簡学会主催『東アジア「論語」の伝播と桂陽山城』2020年11月27日
- ・橋本繁「釜山益山城木簡と佐波理加盤付属文書」慶北大学校人文学術院HK+事業団第2回国際学術大会「木簡を通してみた古代東アジアの物資流通と管理」2021年2月26日
- ・堀裕「日本古代と東アジアの宗教」, 歴史学研究会古代史部会, 2021年1月24日, オンライン
- ・堀裕「東アジア宮中仏事の比較史—日本と百濟・新羅を中心に—」, 日韓古代比較宗教史国際シンポジウム, 2021年2月28日, オンライン
- ・三上喜孝「日韓の木簡からみた古代東アジアの医薬文化」韓国・慶北大学校人文学術院HK+事業団 第1回国際学術大会「古代東アジア文字資料研究の現在と未来—韓国・中国・日本出土木簡資料を中心に—」2020年11月5日（木）～11月7日（土）, 韓国・国立慶北大学校（オンライン参加）
- ・三上喜孝「古代日本における論語木簡の特質—韓国出土の論語木簡との比較から—」韓国・桂陽山城博物館, 慶北大学校HK+事業団, 韓国木簡学会主催国際学術大会「東アジア論語の伝播と桂陽山城」2020年11月26日（木）～11月27日（金）, 韓国・仁川広域市・桂陽山城博物館教育室（オンライン参加）
- ・三上喜孝「「百濟と新羅の都城の考古学的研究」に対する討論文」東北学院大学アジア流域文化研究所・中国社

会科学院考古研究所主催オンライン国際シンポジウム「中国都城考古の最前線1—漢魏洛陽城・鄴城の考古最新知見および日韓古代都城の発掘と研究—」2020年12月19日（土）～12月20日（日），東北学院大学アジア流域文化研究所（オンライン参加）

- ・三上喜孝「平泉出土文字資料へのアプローチ（1）饗宴と文字」平泉学フォーラム，2021年2月7日（日），一関市文化センター中ホール（オンライン参加）
- ・三上喜孝「観音信仰，百済から日本へ—『観世音心験記』を出発点として—」日韓古代比較宗教史国際シンポジウム，2021年2月28日（日），東北大学（オンライン参加）

#### 【書評】

- ・稲田奈津子「書評 榎本淳一著『日唐賤人制度の比較研究』」『史学雑誌』129編9号，65-74頁，2020年9月
- ・植田喜兵成智「鄭東俊著『古代東アジアにおける法制度受容の研究—中国王朝と朝鮮三国の影響関係を中心に—』『唐代史研究』23，2020年8月，119-126頁
- ・畑中彩子「書評 馬場基著『日本古代木簡論』」『古代文化』72-4，2021年3月，132-134頁

#### 【翻訳】

- ・朴竣鎬（翻訳：稲田奈津子）「韓国古文書におけるサインと身分・性別」『国立歴史民俗博物館研究報告』224，2021年3月，181-197頁，ISSN0286-7400，査読有。
- ・文淑子（翻訳：稲田奈津子）「朝鮮時代の契約文書授受の裏面—本文記の種類と特徴について—」『国立歴史民俗博物館研究報告』224，2021年3月，199-212頁，ISSN0286-7400，査読有。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

赤羽目匡由 首都大学東京人文科学研究科・准教授  
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授  
 植田喜兵成智 学習院大学東洋文化研究所・助教  
 橋本 繁 韓国・慶北大学人文学術院HK研究教授（研究協力者）  
 畑中 彩子 東海大学文学部・准教授  
 堀 裕 東北大学文学研究科・准教授

◎三上 喜孝 本館研究部・教授

### (18) 基盤研究（B） 西遷・北遷東国武士の社会的権力化 2019～2022年度 （研究代表者 田中 大喜）

#### 1. 目的

本研究の目的は，13世紀後半～14世紀にかけて顕著になった，西遷・北遷と呼ばれる東国武士の西国や東北地域の所領への移住の実態について明らかにすることにある。東国武士は，日常的に交流してきた在来諸勢力との社会的合意を形成することによって，西遷・北遷先の所領に形成されていた地域社会を統合・編成する主体（権力）になることができた。本研究では，こうした現象を西遷・北遷東国武士の社会的権力化と捉え，東国武士の西遷・北遷という歴史事象の本質と理解し，その実態を究明する。

その際，本研究では西遷・北遷東国武士と在来諸勢力とを相互規定的な関係にあるものと捉えるため，文献資料・出土遺物・石造物・仏像等，両者の多様な諸資料を広く収集・分析し，文献史学・考古学・美術史学・民俗学・歴史地理学による総合的研究として進める。これにより，両者の社会的合意の内実を立体的に究明し，東国武士の西遷・北遷の歴史像を実証的に一新する。

#### 2. 今年度の研究計画

4月中に昨年度台風19号の影響により実施できなかった第2回目の郡山資料調査を実施し，6月中に調査成果のとりまとめを行う。また，5月中に昨年度九州豪雨により一部しか実施できなかった第1回目の小城資料調査の続きを実施し，7月中に調査成果のとりまとめを行う。これらを受けて，8月中に昨年度の調査成果の検討・共有を目的とした研究会を国立歴史民俗博物館において開催する。

9月から12月にかけて，昨年度と同じく，宗教資料班・文献資料班・歴史地理班・考古班・民俗班ごとに肥前国小城郡域および陸奥国安積郡域の現地調査の続きを行う。宗教資料班は，小城郡・安積郡域の中世石造物と中世

仏像を悉皆調査し、金石文・胎内銘・仏像様式等から当該地域の東国武士と在来諸勢力の動向を抽出する。歴史地理班は、小城郡・安積郡域の近世地誌・絵図、地方文書、明治期地籍図から抽出した情報をもとに現地での聞き取り調査と水利調査を進める。これらにより、両地域の東国武士・在来諸勢力双方の拠点および地域開発に関わる基礎データを集積する。考古班は、小城郡・安積郡域の中世城館・集落・集散地遺跡の出土遺物を悉皆調査し、当該地域の城館・集落・集散地の消長を抽出する。民俗班は、小城郡・安積郡域の近現代の生業と信仰に関する現地での聞き取り調査を実施し、当該地域の風土的特質を抽出する。そして、文献資料班は、小城郡域に所在する肥前千葉氏に関わる中世文書原本の調査・撮影を実施する。

1月から2月にかけて、各班ごとに調査データをフォーマットに入力して整理する作業を進める。また、整理した作業データは研究代表者へ送り、集約する。

3月中に国立歴史民俗博物館において研究会を開催する。各班ごとに今年度の調査成果を報告し、研究分担者・研究協力者全員でこれを検討して、情報の共有化を図る。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

新型コロナウイルスの感染拡大を予防するための緊急事態宣言の発出を受け、4月～7月に計画していた資料調査と調査成果のとりまとめはすべて行うことができなくなった。宣言解除後も、資料所蔵先によっては調査の許可が下りず、さらに研究分担者や研究協力者のなかには出張の許可が下りない者もいたため、9月～12月に計画していた資料調査も大幅に変更せざるをえなくなった。

その結果、今年度の資料調査は小城郡を対象を絞り、できる範囲で行うことにした。歴史地理班は、7月・9月～12月・3月に小城郡域の水利調査と現地での聞き取り調査を実施した。考古班は、10月に小城郡の中世石造物の調査を行った。文献資料班は、3月に光勝寺文書の調査・撮影を行った。また、昨年度末に延期した昨年度の調査成果の検討・共有を目的とした研究会は、8月にかろうじて国立歴史民俗博物館において開催することができた。

わずかならでも実施できた上記の調査データは、各班でフォーマットに入力して整理を進めた。3月に国立歴史民俗博物館において研究会を開催し、研究分担者・研究協力者全員で調査データを検討して、情報の共有化を図る予定だったが、1月に再び緊急事態宣言が発出されたことを受けて来年度へ延期した。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

#### 【研究分担者】

- ◎田中 大喜 本館研究部・准教授
- 井上 聡 東京大学史料編纂所・准教授
- 貴田 潔 静岡大学人文社会科学部・准教授
- 黒嶋 敏 東京大学史料編纂所・准教授
- 神野 祐太 神奈川県立歴史博物館学芸部・学芸員
- 鈴木 康之 県立広島大学人間文化学部・教授
- 高橋 典幸 東京大学大学院人文社会系研究科・准教授
- 松田 睦彦 本館研究部・准教授
- 村木 二郎 本館研究部・准教授
- 湯浅 治久 専修大学文学部・教授
- 渡邊 浩貴 神奈川県立歴史博物館学芸部・学芸員

#### 【連携研究者】

- 荒木 和憲 本館研究部・准教授
- 後藤 真 本館研究部・准教授

#### 【研究協力者】

- 池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会・文化財調査員
- 小野 正敏 本館・名誉教授
- 栗木 崇 熱海市教育委員会・学芸員
- 佐々木健策 小田原市文化財課・係長
- 田久保佳寛 小城市教育委員会・係長
- 竹下 正博 佐賀城本丸歴史館・課長
- 土山 祐之 本館・資料整理等補助員

(19) 基盤研究 (B)  
 「隠し売女」から「淫売女」へ—近世近代移行期における売春観の変容  
 2019～2021年度  
 (研究代表者 横山百合子)

1. 目的

1872年発令の芸娼妓解放令は、“遊女にはその身体を所有する者がいて性を売らされている”とみる近世社会の通念が、売春は“自ら売る淫らな女”によるものとする近代の売春観に変わる起点となった。本研究では、これを近代売春観の起点となる“売春の再定義”として位置づけ、そのような転換が行われた歴史的事情を、地域社会や遊女自身の“再定義”の受け止め、および売春に対する国際社会の動向や性感染症に対応する近代医学の進展なども視野に入れて解明することを目的とする。このような考察を通して、従来一片の紙切れとされてきた解放令の歴史的位置づけを刷新すると同時に、“再定義”によって進行した、売らせる者や買う男性の不可視化、娼婦へのまなざしの変化、さらには娼婦自身が売春をスティグマとして内面化する過程を明らかにし、近世近代移行期の社会像を連続と断絶の両面から描くことを目指す。

2. 今年度の研究計画

研究の具体的検討課題は、Ⅰ 国際環境と国内状況をふまえて、1872(明治5)年10月芸娼妓解放令の制定過程と歴史的意義を具体的に明らかにすること、および、Ⅱ 地域社会の実態をふまえた売春観の変容の解明の二点ある。研究2年度の本年は、Ⅰの課題に向けて、初年度に引続き(a)「売春の再定義」が行われた国内的背景を、法令の審議・制定過程や維新政権内部の勢力関係にも留意して解明するため、研究代表者を中心に、井上馨関係資料(三井文庫)・岩倉関係文書(国立国会図書館蔵等)・江藤新平関係文書(佐賀県立図書館等)、太政類典・大日本外交文書等の行政資料の調査を集中的に行う。また、(b)伝染病法に反対するイギリスのフェミニズム運動など、当該期の国際的動向が、芸娼妓解放令制定過程および買売春管理制度の成立にどのように影響するのかを具体的に解明するため、分担者森田が、分担者廣川とも協力し、イギリス海軍省文書、法務官僚レベルの諸史料を中心に海外史料の収集に着手する。Ⅱ「売春の再定義」による売春観の変容については、分担者廣川が中心となって、連携研究者・代表者横山とともに、初年度に収集した地域史料の整理と本格的考察を進める。特に、地域社会と娼婦自身の動向を把握するうえで中心的な史料となる、東京府文書(東京都公文書館蔵)、横浜開港資料館収集史料、民事判決原本(日文研)、西田長寿収集娼妓関係資料(国立歴史民俗博物館蔵)、小新聞類(明治新聞雑誌文庫蔵)の収集のうち、明治ゼロ年代のものを中心に整理・分析を進める。

3. 今年度の研究経過及び成果

本年度は、計画していた東京都公文書館、三井文庫のCOVID-19感染拡大による閉鎖や公開制限により、資料収集・分析が一部遅れている。しかし、初年度の研究および第2年度収集分の資料分析に基づき、2020年10月6日～12月6日に国立歴史民俗博物館で開催した企画展示「性差(ジェンダー)の日本史」の6章「性の売買と社会」において、その成果を発表することができ、展示のなかでも特に注目されるところとなった。展示に加え、下記の成果を得た。

<書籍・論文>

企画展示図録『性差(ジェンダー)の日本史』第6章「性の売買の歴史を考える視点」pp.176-179(横山)、「2 近世遊廓の成立—商品化される遊女」pp.186-189, pp.194-203, 「コラム新吉原稲本屋抱え遊女の書状」pp.206, 「4 芸娼妓解放令の衝撃」pp.206-207(以上、横山百合子)、「性売買と医療」pp.210-211(廣川和花)

廣川和花「医療の〈近代化〉と施療・救済の観点から」『歴史科学』241号, pp.15-19, 2020年5月

廣川和花「ハンセン病者の社会史—日本の〈近代化〉の中で—」秋田茂・脇村孝平編『人口と健康の世界史』, ミネルヴァ書房 2020年8月

森田朋子・林沙也加「資料紹介 横浜梅毒病院の運営費と「商館行」遊女」『中部大学人文学部研究論集』45号 pp.1-28, 2021年1月

横山百合子「遺跡を尋ねて 第Ⅳ期(第5回)新吉原 遊女小稲と幕末維新期の新吉原遊廓」『学会会報』944, pp.68-76, 2020年9月

横山百合子 Expanding and Multilayering Networks in Nineteenth-Century Japan: The Case of the Shin-Yoshiwara Red-Light District, Women and Networks in Nineteenth-Century Japan (Bettina Gramlich-Oka, Noriko Sugano, Anne Walthall and Fumiko Miyazaki, ed.), pp.223-245, University of Michigan Press, 2020, Oct.

横山百合子「東京の明治維新—錦絵にみる町方住民の意識と維新政府の統治—」大阪経済大学日本経済史研究所『経済史研究』24号, pp.1-20, 2021年1月

横山百合子『須坂地域の史料目録 006坂本康之家文書・068坂本家関係文書』第11集(目録作成と解題執筆), pp.1-382, 2021年3月, 須坂市文書館

<講演・報告>

廣川和花「宮崎千穂「医療警察, 感染源追求, 非感染証明—ロシア帝国の中央アジアにおける〈梅毒との闘い〉—」へのコメント」北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 非常勤研究員セミナー2020年12月10日

廣川和花「日本における感染症史研究の現状と課題」専修大学社会科学研究所定例研究会 2020年10月11日

廣川和花「日本の感染症史研究の現状と課題」医学史と社会の対話 オンラインセミナー「医学史研究者と考える感染症の過去と未来」2020年7月25日

横山百合子「歴博企画展示「性差の日本史」の成果と課題—「第6章性の売買と社会」を中心に—」遊廓社会研究会(科研「一次史料に基づく近世～近代日本の「遊廓社会」に関する総合的研究」主催) 2021年3月28日

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎横山百合子 本館研究部・教授

廣川 和花 専修大学文学部・准教授

森田 朋子 中部大学人文学部・教授

### (20) 基盤研究 (C)

#### 1970年代～80年代の消費者運動の再編成課程に関する実証的研究 2018～2020年度

(研究代表者 原山浩介)

##### 1. 目的

本研究は、1970年代から90年代初頭にかけての、消費者運動の再編過程を、関西における消費者団体等の動きに焦点を当てて解明しようとするものである。この時期は、高度経済成長期にみられた消費者の権利と異議申し立てをめぐる諸団体の主張の一体性の解体過程として経験された。その背景には、経済成長の達成と豊かさの実感の獲得に伴う消費者の嗜好の多様化と、公害・環境汚染の前景化に伴う消費行動の自覚的な問い直しという、大きく二つの要因があった。ここに、地域レベルでの生協運動など住民を担い手とする運動の担い手の世代交代が絡むことで、消費をめぐる運動の再編成が起こった。それまでの消費者運動が有していた一体性の解体を孕むこの一連の過程を検証しながら、消費をめぐる社会的に共有される問題構成とそれへの取り組みがどのように再編成されたのかを明らかにする。

##### 2. 今年度の研究計画

当初は、2020年度は最終年度に当たるため、前年度までに十分に推進できなかった現地調査を集中的に行いたいと考えていた。しかしながら、COVID-19の影響により実際には調査に出ること困難であった。以下に示すのは、あくまでも当初計画である。

前年度に作成した消費者団体の整理データ、ならびにこれに付随する文献目録を活用しつつ、関西の消費者団体の全体像を明らかにする。本研究においてとりわけ重要になるのは、1970年代を区切りとする消費者運動の構造変容である。1970年代以降に活動を活発化させた諸団体の関係者のなかには、まだ存命の人びともおり、聞き取り調査の実施を行っておくことの意義は大きい。また、特に京都・滋賀では琵琶湖の汚染問題の重要性が高く、これをめぐっては、これまでの琵琶湖をめぐる諸運動の叙述および研究の検証と併せて、直接的な被害者であった漁師の動向も踏まえておく必要があり、可能な限り聞き取り調査の幅を広げたいと考えている。

また、前年度3月に、大阪のエル・ライブラリーで実施した研究会において、社会党を中心とする革新系の政党と、1970年代以降の新興消費者団体の主張に親和性があること、しかしながら革新政党の存立を支えるほどの支持基盤になったわけではないという微温的な関係だったことを報告した。この点については、日本における「革新」のありようを明らかにするという意味でも重要な部分であり、今年度の研究・調査の過程で議論を煮詰めていく。

以上を踏まえて、消費者運動の構造変容を、革新政党のありようや、その後の及んでくるグローバリゼーション、ないしは国民経済的な発想の解体との関わりのなかで理解する枠組みを作ることとする。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

2020年度に現地調査を集中させることを計画していたのだが、COVID-19の影響により、聞き取り調査自体が難しくなった。このため、若干の資料調査を行ったほかは、研究室において可能な資料・情報の整理と執筆等の活動に専念することとしつつ、1970年代以降の前衛に位置した京都の消費者団体に関わる分析と、2消費者運動を構造的に条件付けた1970年代以降の資本主義と政治の変容の、二つの方向からの論稿のとりまとめを先行させることとした。

1については、京都生活公害協議会に焦点を当てつつ、京都消団連、洛北生協/京都生協との関係のなかでの活動の展開とその限界を検討した。ここには、政治的な党派性が絡みながら、ここに示した団体以外の諸団体との間に距離があり、そのことが活動の展開の制約になったこと、しかし他方でそれら諸団体とは異なる会員の定着性の高さや、他の諸団体との比較において活動の立ち上がりがかつたといった特徴があったことを示した。本来的には、ここに「革新」の内部矛盾と、地域史/消費者運動史のなかで「革新」が有した動員上の/生活思想上の意義についてまとめるべきところではあるが、これらについての本格的な検討は課題として残すこととなった。

2については、学会報告で、1970年代以降の米をめぐる段階的な自由化過程を、国民経済の解体、ならびに、流通の自由化/国際間の貿易自由化という二つの意味での資本主義の「自由化」過程として捉え、これとの関わりにおいて消費者団体がどのような動きを取ったのかを検討した。煎じ詰めれば、消費者団体の立場は、国民経済の解体を阻止しつつ、「消費者にとっての共通の利益」の擁護を旨とする消費者運動の立て方の、ほぼ最後の闘いとしての米問題への対応を行ったことを示した。この報告については、2021年度に論稿として活字化される予定である。

### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎原山 浩介 本館研究部・准教授

## (21) 基盤研究 (C)

### 博物館展示の要素を取り入れた歴史資料画像Web閲覧の新手法の構築 2018～2020年度

(研究代表者 鈴木卓治)

#### 1. 目的

インターネットで日本歴史資料の高精細デジタル画像の公開が進む現状に鑑み、単なる熟覧の範囲を超えた、博物館展示の要素を取り入れた歴史資料画像閲覧の方法を提案する。具体的には、IIIFに代表される、呼び出し方法が標準化された超高精細デジタル画像の全体あるいは一部をWebブラウザの画面上に構成して表示し、さらに動きや条件分岐を含むシナリオを与えて、それらの画像をタイミングよく切り替え解説を含めて提示するWebコンテンツの制作システムを試作する。「展示」の技法を導入することで、単なる資料熟覧の範囲を超えて、資料の持つ意義や資料間の相互関係を立体的に紹介するコンテンツを、最小限のコストで、インターネット上で世界中に公開することを目指すとともに、IIIFの採用により、複数機関が所有する資料の相互利用を可能とし、インターネットの特質を生かした「仮想展示」の可能性を広げることを目標とする。

#### 2. 今年度の研究計画

本課題で目指すのは、「PowerPointスライド」並のプレゼンテーションを、個別にプログラムを作るより少ない手間で作成できるオーサリングシステムの実現である。

第3年度(令和2年度)は、昨年度に引き続きシステムの検証と改良ならびに実用化にむけての超高精細画像データの作成を実施する。とくに昨年度達成できなかった4. バルーンによる解説文表示(どの部分にどのタイミングで何秒間で)機能、5. 図形や矢印等の説明を補助する図形の表示(どこにどの大きさ、形で、何秒間)機能、6. ボタン等による簡単な条件分岐表示(表示する画像を選択するなど)機能の実装を行い、システムの評価と成果発表を実施する。国際研究集会での成果発表を目指す。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

本年度は、新型コロナウイルス(COVID-19)への対策を余儀なくされたこともあり、当初予定を変更して、端末に直接接触せずにコンテンツを操作できる非接触型情報端末「さわらずめくり」の開発を実施した。この成果は画像電子学会デジタルミュージアム・人文学研究会で発表するとともに、歴博の秋の企画展示「性差の日本史」ならびに民博の春の特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」にデジタルコンテンツを出展し、来館者の利



用に供することができた。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎鈴木 卓治 本館研究部・教授

### (22) 基盤研究 (C)

日本仏教と東南アジア仏教のとの比較研究—政治と権力の視点を中心として—

2019～2021年度

(研究代表者 松尾恒一)

#### 1. 目的

本課題「日本仏教と東南アジア仏教のとの比較研究—政治と権力の視点を中心として」は、日本史学・日本民俗学の研究者と、主として東南アジアを調査地域とする文化人類学研究者による共同研究である。大乘仏教圏の日本仏教と上座部仏教圏との比較を、国家統治のあり方、各地域で仏教と関係を結んだ民俗信仰、特に民俗神と仏教との関係等に注目して研究し、数世紀～1000年以上の仏教の歴史を有するアジア諸地域の、仏教が果たした社会的な役割と、現代社会への継承のあり方を解明することを目的とする。

#### 2. 今年度の研究計画

第2年度となる本年度は、年度当初からのコロナウィルスの全国、東南アジア地域を含む世界的な拡大により、国内外ともに移動について、国や都道府県から感染対策のため控えるように呼びかけられた。また、分担者の所属の大学や機関では、やはり感染対策として、対面での共同研究会の開催が基本的には認められなかった。こうした状況に対応するため、新型コロナウイルスの国内外の状況を注意深く見つつ、密に連絡をとり、地域調査と共同研究会の開催について検討することとした。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

2020年度は、新型コロナウイルスの国内外の蔓延のため、計画していた東南アジア(ベトナム地域の調査を計画)及び、国内の寺院の仏教儀礼の調査のいずれもできなかった。そのため、調査については、分担者が個々に国内の寺院と周辺地域の神仏信仰・行事、社会組織、生業との関係性を主とする民俗調査と史資料の調査を推進した。

片岡は、特に愛媛県菊間町に伝承される戦国落城伝説とその崇りの信仰を主題とする研究を進め、近代以降の行政主導の地方誌編纂により「定説」が形成された過程を解明し、亡霊の崇りは権力への異議申し立てよりは、むしろ書物の権威や国家権力を背景に確立した側面が強いことを明らかにした。

松尾は、近世の寺檀制度のなかでのかくれキリシタンのあり方をテーマに、その組織が数多く存続していた長崎の諸地域の聞き取り、遺物調査を進めた。本調査により、外海地域のように、檀那寺院がむしろ潜伏キリシタン組織を守った例や、根獅子のように集落全体が潜伏キリシタンであったものの、それが露見した際、仏教の一宗派であることを主張して摘発の危機を乗り切ったこと、また、日本に先立って中国明代の観音信仰がマリア信仰や造形の大きな影響を受けて変容し、これが特に長崎における観音をマリアとして信仰するに至る基盤としての役割を果たしたことを中国、ヨーロッパの歴史文献、絵画・立像等の遺物を資料として解明した。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

片岡 樹 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

中西 裕二 日本女子大学人間社会学部・教授

上島 享 京都大学文学研究科・教授

◎松尾 恒一 本館研究部・教授

(23) 基盤研究 (C)  
幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究  
2019～2021年度  
(研究代表者 樋口雄彦)

1. 目的

江戸幕府に仕えた幕臣のうち、知行地を有した旗本を事例に、維新前後の政治的・社会的動向をふまえ、武士身分の近代社会への順応のし方を明らかにする。独立した領主であることと徳川家の直臣であることが、幕府瓦解時にいかに再認識され、どちらが優先されたのかという問いが基本的なテーマとなる。具体的には、旗本領の名主をつとめ、家臣にも取り立てられた豪農の家に伝来した資料（静岡県伊豆市・飯田家文書）を素材に、伊豆国田方郡牧之郷村（現伊豆市）などに知行地を有した旗本松下家を主要な分析対象とする。幕府が倒れた後、一時的に采地への移住・土着を経験した高禄の旗本の多くが、まもなく旧幕府・徳川家の臣下を離脱し新政府直属の朝臣となることを志向した背景や、その選択を支えた家臣・領民との近世後期からの関係性、明治2年（1869）に領主の地位を喪失した後も大正・昭和期まで続いた旧領との交流のあり方などに焦点をあてる。

2. 今年度の研究計画

本研究が調査・研究の主要な対象資料として位置付けている牧之郷飯田家文書（静岡県伊豆市）について、未整理状態になっている分の資料整理作業（整理保存用封筒への記述・収納および文書保存箱への収納）を行い、将来に向けて目録作成の準備を進めるとともに、研究テーマ（幕府瓦解後の旗本土着の動向）に必要な資料の確認と撮影を実施する。また、撮影した資料の解読・入力を行い、基本的な事実を把握するとともに、テーマに関する考察を加える。

3. 今年度の研究経過及び成果

当初、牧之郷飯田家を訪問しての調査を月1回以上のペースで計画していたものの、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため、9月と11月に行った2回の調査を除き、予定通り実施できなかった。従って、主に前年度に撮影していた資料の解読や考察を進めることに終始した。それにより、撮影した文書50点余を解読し、その内容を読み込むことで、研究テーマを論考としてまとめる際の章立てを構想することができた。現時点で、「知行所への土着と農兵取り立て」、「新政府軍への参加と箱根戦争」、「論功行賞と朝臣としての身分」、「旧采地における記録と記憶」といった章立てで論考を構成できるのではないかと考えている。

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎樋口 雄彦 本館研究部・教授

(24) 基盤研究 (C)  
帝国日本における学校儀礼教育の歴史：声・音の検討を中心に  
2019～2021年度  
(研究代表者 樋浦郷子)

1. 目的

本研究は、植民地期の台湾や朝鮮において実施された学校儀式や学校で要請された拝礼や低頭などの儀礼の歴史に、「声」「音」という問題意識から迫るものである。「声」とは、儀式時の校歌斉唱や「沈黙」、「皇国臣民の誓詞」斉誦や「御製」の誦唱、スポーツ大会の宣誓等を想定する。「音」とは、ラジオ体操の音や号令、笛やラッパ、時鐘を想定する。実際には自分の統制のもとにあるはずの身体および精神に、他者の介入を容易にさせる媒介物として「声」「音」は重要な役割を担っている。とくに植民地の学校教育のなかにあらわれた具体的なそれらの様相をつぶさに観察することを通じ、帝国日本において就学することがどのような意味を付与するものであったのか、「帝国日本の国民」はどのように創出されようとしたのかという大きな問題に、「声」「音」に着目しながら接近を試みたい。

2. 今年度の研究計画

2020年度には、年度末に国際研究集会（シンポジウム）を実施し、台湾や韓国の研究者を招聘して協働的に課題

に接近する計画を立て、実施2週間前まで準備を継続した。しかし、予想できない新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により、中止に至った。このシンポジウムでは、東アジア史の視座で音読（素読）、筆写、暗唱など、多様な身体の動きを歴史的に検討することを目的としていた。この点は、本研究の課題として引き続き検討を継続する。最終年度には、昨年度までに達成できなかった課題の検討を行うとともに、当初の予定どおり「誓う」「誓わせる」という方法を用いた教育について歴史的な検討をすすめることを目標とする。これらは、21年度または22年度に朝鮮史を研究する学術団体機関誌への投稿を予定する。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

2020年度においては、主に学校儀式・儀礼を含むものとしての運動会など、スポーツの歴史を視野に入れた研究を実施した。とりわけ、植民地・日本内地を問わず学校日誌や沿革誌など、学校保存書類のなかにあらわれる学校儀式など行事の様態に迫り、次のように公表した。

- (1) (口頭発表) 樋浦郷子「意図した断絶と意図せざる継承について—1945年の台湾と朝鮮における学校文書から」2020レクチャーシリーズ 第2回 公開特別講演 2020年8月28日 京都大学 グローバル教育展開オフィス
- (2) (口頭発表) 樋浦郷子「韓国併合直後の公立普通学校—『草溪公立普通学校沿革誌』を手がかりとして—」教育史学会第64回大会（オンライン開催）2020年9月27日
- (3) 樋浦郷子「書評 広瀬玲子『帝国に生きた少女たち：京城第一公立高等女学校生の植民地経験』」『歴史学研究』(1001) 歴史学研究会 53-56 2020年9月
- (4) 樋浦郷子「(遺跡を訪ねて II) 八重山島蔵元跡から」學士會会報 (947) 110-116 2021年2月
- (5) 樋浦郷子「書評「江戸しぐさ」の現在と未来—原田実氏著作を読んで—」『史苑』81 (1) 立教大学史学会 2021年3月

### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎樋浦 郷子 本館研究部・准教授

## (25) 若手研究

### 幕末維新期の角館地域を中核とした知的関係と政治意識の形成

2018～2021年度

(研究代表者 天野真志)

#### 1. 目的

本研究では、近世以来多様な学問体系を受容し、複合的な文化的空間を形成した出羽国秋田藩角館地域を対象に、①平田国学流入以前の文化的特質の形成、②平田国学と角館地域との対峙、③平田国学との関係を通じた政治意識の形成を検討する。これまで国学思想の政治的役割についてはその具体像を提示するに至っていないが、本研究では秋田藩角館地域を対象としたモデルケースとして、平田国学との関係を通じた政治意識の具体相を提示し、近代国家形成過程における文化・思想の政治的意義を再検討することを目指す。

#### 2. 今年度の研究計画

新型コロナウイルスの影響で現地調査を含む史料調査の計画が困難であるため、史料所蔵宅との情報交換を通して史料情報や状態の確認を進めていく。また、前年度までに調査・撮影した史料情報の整理を進めるとともに、史料の翻刻・検討を進め、史料紹介や論文を中心とした成果発信を進める。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

新型コロナウイルスの影響により現地調査が不可能となったなか、これまでの調査により蓄積した史料の翻刻・検討をおこない、災害文化と地域社会形成史研究会で「出羽国佐竹家の由緒と歴史意識」として研究発表をおこない、秋田藩内における歴史意識形成の背景とその過程における平田国学との関係性について議論を行った。また、「幕末期角館地域をとりまく学問と政治」として『るねっさんず・角館』に寄稿し、角館地域における学問と政治の関係について成果を発信した。さらに、史料所蔵者とオンラインで状況確認をおこない、史料の状況を把握するとともに、今後の調査・保存の展望について協議を行うことができた。あわせて、関連書籍の書評を執筆して本研究に関連する研究状況を整理し、成果の集約に向けた研究史の検討を進めた。

これらの成果を踏まえ、最終年度での成果発信に向けて情報整理を行い、成果の刊行に向けて原稿の執筆と調整

をおこなうことができた。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎天野 真志 本館研究部・特任准教授

### (26) 若手研究

#### 日中戦争期華中における占領地統治の進展と現地秩序の改変過程 2018～2020年度

(研究代表者 吉井文美)

##### 1. 目的

本研究は、日中戦争期の華中を対象に、日本の中国支配の拡大とともに、現地を支配する主体が「正当な政府」(中華民国)から、日本が設立した「事実上の政府」(維新政府・汪精衛政権)へと移行する過程において、在来の国内法・国際法に加えられた変化と、その変化が惹起した国際的影響について、明らかにするものである。これによって、宣戦布告を行わずに「事実上の政府」による占領地支配を行うという方法をとった、日中戦争の占領地支配上の特質に迫る。

##### 2. 今年度の研究計画

今年度は、維新政府(1938～40年)から汪精衛政権(1940～1945年)への移行期を対象に、日本による中国支配の進展が、華中の沿岸交通や貿易にもたらした影響について検討する。とくに華南や香港の経済との関係の変化に注目する。

##### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、もともと汪精衛政権期の治外法権撤廃問題や租界返還問題をテーマに研究することを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響などにより、海外での関連する資料調査の実施が困難になった。そのため、これまでに収集してきた史料と国会図書館等の利用可能な機関での調査で対応できるテーマを選びなおし、日中戦争期の中国の沿岸交通や貿易の変化とその影響について検討することにした。今年度の研究を通して、中国の沿岸貿易に依拠した利権をイギリスは重視しており、日本の沿岸封鎖によって華中と華南、香港などの地域を結ぶ経済活動が停滞したことをイギリスが問題視した事実を明らかにした。今年度の研究成果は、2021年度に学会で報告する予定である。

また、昨年度以来検討してきた日中戦争期の中国海関の人事に対する日本の政策をめぐる研究をまとめ、学術誌に発表した。

##### 【論文】

「日本の中国支配と海関政策の展開：人事問題を中心として」『日本歴史』865号(2020年)

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎吉井 文美 本館研究部・准教授

### (27) 特別研究員奨励費

#### 近代日本の先祖祭祀と文化的アイデンティティ—東アジアとの差異化 の観点から— 2019～2021年度

(研究代表者 問芝志保)

##### 1. 目的

本研究は、先祖祭祀研究と文化ナショナリズム研究とを架橋し、「日本は近代的な〈他者との出会い〉のなかで、先祖祭祀を核とする宗教文化的ナショナルアイデンティティをどのように形成し、現実へと反映させてきたのか」を明らかにすることを目的としている。研究代表者はこれまで、19世紀末以来の初期グローバリゼーションのなか、西洋化・文明化の受容やそれへの対抗で揺れ動く日本が、〈あるべき日本の先祖祭祀と墓制〉を創造し、「先祖を祀る民族」というアイデンティティを獲得したことに注目し、その具体相を明らかにしてきた。本研究はその成果を

引き継ぎつつ、近代日本がアジアへ向けた視線や、それがもたらした実質的な影響をふまえながら、アジアという〈他者との差異化〉の観点からもたらされた、先祖祭祀と墓制の再編の問題を解明することを目指すものである。この目的のため、①明治初期の神葬祭政策下で形成された墓地観・墓観、②明治中期～大正初期頃における啓蒙主義的・開明派知識人におけるアジア葬送文化に対する評価（単にアジアの祖先崇拜や葬送墓制習俗を軽視・蔑視するのではなく、称賛・尊敬していた可能性も含めて検討）、③特に台湾を事例とし、台湾の墓制に対する日本側の評価と介入、という3つの段階的テーマを設けて分析を進める。

## 2. 今年度の研究計画

研究初年度は上記テーマ①のなかでも、近世末期～明治20年頃までの間における神葬祭墓地をめぐる思想や言説について、主に国内の図書館や資料館を活用して資料収集を行い、その内容の分析を行った。2年目である今年度は、テーマ①②について引き続き補足的調査・分析を行うとともに、③について、国立台湾図書館の台湾研究センターや国立台湾大学図書館、台北市立図書館にて、台湾総督府関係資料を中心に日本統治期の墓地に関する制度史、法制史的調査を行う。また、当時の新聞雑誌や『民俗台湾』『文芸台湾』など各種団体の発行物、エッセイ、文学作品なども含めて幅広く収集する。それらの資料を用いて、台湾およびアジアの祖先崇拜や葬送墓制がどのように描写され、位置づけられているかについての分析を進める。また、台湾の古い墓地を実地調査し、日本統治期に「旧慣」とみなされた台湾在来の葬送墓制がどのようなものであるかを確認するための、予備調査を行う。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

テーマ②に関し、国内における資料収集と分析を行った。『臺灣文化志』（昭和3）、『朝鮮彙報』（大正8）、『臺灣慣習記事』（明治40）などの資料を蒐集することができた。たとえば伊能嘉矩著『臺灣文化志』は、10年間外務省所属として台湾に駐在していた著者が、台湾の文化について具に記した当時初めての刊行物であり、その内容からは、当時の日本の知識人が、台湾の為政者・知識人による政策や、民俗慣行への評価を大いに引き継ぎながら、台湾の葬送文化を記述していることが見て取れる。

以上の成果については次年度初頭までに補足的調査・分析を行い、得られた成果を論文として投稿し、また国内学会・研究会での口頭発表で公表する予定である。

なお計画段階では、2・3年目に台湾現地での資料収集・調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス流行にともない、本年度台湾への出張はかなわず、現地での調査が行えなかった。次年度も当面は日本国内において台湾の葬送墓制に関わる文献の蒐集、分析を進める予定である。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎問芝 志保 本館研究部・外来研究員

## (28) 基盤研究(C)

### 近代移行期、蝦夷地・北海道分領支配に関する歴史情報の復元的研究 2020～2022年度

(研究代表者 三野行徳)

#### 1. 目的

本研究は、北海道の歴史的経験と深く関わる二度の分領支配（①幕末期に東北地方の大名などが警衛のために分割支配②明治初年に北方警備と開拓のために全国38の領主が分割支配）と関わって、全国の大名家のアーカイブズのなかに残された、近代移行期の北海道の歴史情報の収集・組織化を目指すものである。東北諸藩を中心とする分領支配を担った領主のアーカイブズのなかには、開拓・移住・警衛といった課題のもとで、近代移行期の蝦夷地・北海道の実態を示すさまざまな記録が残されている。しかし、これらのアーカイブズは、残された場所（旧藩地）と内容（北海道）との地理的・内容的乖離により、地域資料として十分に認知されているとは言えない。一方で、明治以降の移住者が北海道に持ち込んだアーカイブズは、旧藩地での前近代の活動を伝える歴史情報であるが、北海道に伝来したが故に、旧藩地では存在すら認識されていないことが多い。このように、明治維新前後の蝦夷地・北海道の分領支配との関わりのなかで分断状況にあるアーカイブズを、分領支配という歴史的経験によって結ばれた両地域の共通の歴史遺産として、整理・保存・研究・活用の途を目指すことが、本研究の目的である。

## 2. 今年度の研究計画

二年度目となる本年度は、東北諸藩・東北地方に伝来した近世～明治初年の北海道・蝦夷地に関わる史料情報の収集を予定通り行う。本年度は、盛岡藩・庄内藩について継続して取り組むことに加え、史料の存在が確認できている弘前藩（弘前市）、秋田藩（秋田県）についても、重点的に調査を行う。

明治初年の移住者が北海道に持ち込んだ史料の整理に関しては、伊達市での整理を引き続き行い、亶理伊達家老田村家文書目録の刊行を準備するとともに、他家の史料についても引き続き目録作成を行う。

資源化に関しては、亶理町で引き続き史料調査・史料集の編さんを行い、成果を史料集として発表する。

以上に加えて、武家の北海道移住に関する共同研究の成果を本科研最終年度に論文集として刊行するべく、研究会を実施する。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

以上の目的・計画の通り、本研究は北海道・東北諸県での資料調査・資料整理を基本的活動に据えている。しかし、周知の通り、本年度は新型コロナウイルスのまん延により、広汎なまん延状況がみられる関東から他地域に調査に赴くことは困難であり、計画の大幅な修正をせざるを得なかった。そのため、本年度の活動は、代表者および研究協力者とともに、オンラインでの研究会と目録作成・史料集の検討作業を中心に据え、現地での調査は最小限にとどめざるを得なかった。オンラインの研究会は合計3回開催し、成果論文集刊行に向けた研究報告を行った。目録検討作業も併せて行い、目録の編成や解題の検討、難読史料や図画資料等の検討を行った。現地での調査は、宮城県亶理町で、史料集刊行に向けた準備作業・検討会を行った。また、北海道札幌市・伊達市にて調査を行い、田村家文書目録刊行に向けた確認作業を行った。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

### 【研究分担者】

◎三野 行徳 ※国立歴史民俗博物館 客員准教授

伊達 元成 だて歴史文化ミュージアム・学芸員

### 【研究協力者】

久留島 浩 本館研究部・特任教授

檜皮 瑞樹 千葉大学大学院人文科学研究院・文学部人文学科歴史学コース・准教授

工藤 航平 東京都公文書館・公文書専門員

石田七奈子 港区郷土歴史館・学芸員

清水 詩織 早稲田大学 教育・総合科学学術院 教育学部・非常勤講師

黒田 格男 だて歴史文化ミュージアム・学芸員

平塚 理子 登別市教育委員会・学芸員

菅原 孝明 一関市教育委員会・学芸員

## 【その他の外部資金】

### (29) 受託研究

冠婚葬祭総合研究所「家族・地域を含めた新たな「つながり」への展望と葬送墓制—死の文化の変容と多元化する社会的紐帯の考察」

(研究代表者 山田慎也)

#### 1. 目的

この研究では、現代における葬儀や墓などの死者儀礼の営みを通して、変容する家族や地域社会の実態と今後の展望について考察することを目的としている。

急速に変わっていく葬送墓制において、従来の先祖観とは異なる家族意識や地域社会の新たな絆、血縁を超えた死者と生者の関係性の構築など、さまざまに模索する様子を見ることが出来る。こうした葬送儀礼をとりまく人々の営みから、家族や社会の新たな絆の形成を考察し、今後の展望について検討する。

その際、新たな時代において必要とされているものを捉える上でも、現在の事態に至る歴史的経緯を踏まえて検討していくことが必要であり、総合的に検討することで、研究成果の社会的な還元を図っていきたい。また大学院

博士課程など若手研究者も交えてプロジェクトを推進することで、儀礼文化研究の発展、育成も意図している。

## 2. 今年度の研究計画

今年度は最終年度として、現在までの研究を総括することとなる。少子高齢化と個人化の進展により、高齢の単身世帯なども増加していくことで、時には葬送儀礼の執行自体が難しくなっている場合も生じてきている。とくに近親者のいない、もしくはいたとしても何らかの事情で関係が途絶えて頼る人がいない高齢者が、終末期の看取りや死後の葬送などの対応がなされない際の社会的対応について、現行制度の成立とその背景、さらには立法過程などの検討を行う。

## 3. 今年度の研究経過

近年の孤立死の増加や引き取り手のない遺骨の増加が見られるが、行政は従来の家や家族を中心としたあり方を基本とし、あくまでも例外的な対処としておこなってきた。そこで、行き倒れへの対応の制度である「行旅病人及行旅死亡人取扱法（明治三二年法律第九号）」と、その前身である明治15年の太政官布告第四十九号の「行旅死亡人取扱規則」について検討を行った。さらに困窮者に対する葬儀支援としての現行法の生活保護法の葬祭扶助、また旧生活保護法、さらにはその立法過程での議論についても検討を行った。そして、生活保護法制定以前における困窮者への支援は救護法でありその内容と、救護法成立以前の1874（明治7）年に包括的一般的な救貧法制である「恤救規則」（明治七年十二月八日太政官達第一六二号）についても検討を行った。

## 4. 今年度の研究成果

日本が超高齢社会になるとともに、個人化が進み高齢者の単身世帯の増加により、終末期への対応ができず、また遺骨も引き取られずに、無縁故者として行政が対応する場合が増えている。現行の制度である、行旅病人及行旅死亡人取扱法、墓地及び埋葬等に関する法律9条、また生活保護法の葬祭扶助においても、前提は近親者による死者への対応であり、行政の対応はその経過措置か例外的措置としてしか仕組みが整えられてこなかった。しかし、現在では家族による死の前後の対応自体が期待さえないケースが増えており、これは決して例外的なものではなくなっている。

そこでその代替として、看取りから葬送への一貫したサポートを行っている神奈川県横須賀市の終活事業の事例や、精神疾患患者の助葬事業を行っている前橋積善会の事例なども検討したが、行政や民間も含め社会として死の前後の一連のサポートが現在必要であり、そこで形成されるあらたなつながりを積極的に作り出していく必要があることも判明した。

## 5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎山田 慎也	本館研究部・教授	鈴木 岩弓	東北大学・総長特命教授
森 謙二	茨城キリスト教大学・名誉教授	小谷みどり	身延山大学・客員教授
土居 浩	ものづくり大学・教授	田中 大介	自治医科大学・教授
玉川 貴子	名古屋学院大学・准教授	宮澤 安紀	筑波大学・博士課程
問芝 志保	日本学術振興会・特別研究員	大場 あや	大正大学・講師

## (30) 受託研究 出土文字資料の集成的研究 (研究代表者 三上喜孝)

### 1. 目的

岩手県では「平泉文化研究機関整備推進事業」に基づき、第1期研究計画（H12～21年度）及び第2期研究計画（H22～R元年度）を通して継続的に研究を推進し、多くの成果を蓄積するとともに、毎年度、「平泉文化フォーラム」及び「平泉文化研究年報」により成果を公開してきた。2020年度開始の第3期からは、5カ年計画で5つのテーマを設定し、大学や国立の研究機関と連携をはかりながら研究を進めていくことになった。本研究課題は、その一つとして、12世紀平泉の政治、文化、宗教の諸相を明らかにするため、柳之御所遺跡を中心とした平泉の出土文字資料の整理・読解・内容検討を行い、同時に12世紀の国内出土事例を収集し、平泉の政治・文化・宗教の諸相を復元することを目的とする。

## 2. 今年度の研究計画

- ・柳之御所遺跡の出土文字資料の整理，読解，内容の検討を行う。
- ・12世紀の国内出土事例を収集し，平泉の政治，文化，宗教の諸相を復元する。
- ・先端的科学機器を用いて文字資料の解読等を行う。
- ・平泉に設置される「新ガイダンス施設」を活用した調査，研究活動（平泉において10日から2週間程度の滞在研究を含む）を行う。
- ・研究成果を「平泉学研究会」と「平泉学フォーラム」及び「平泉学年報」で成果を発表し情報を発信する。

## 3. 今年度の研究経過

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により，現地調査ならびに資料調査を行うことができず，これまでの研究成果の検討を行った。

## 4. 今年度の研究成果

今年度の研究成果を，2021年2月6日の「平泉学研究会」（於岩手大学，オンライン参加）ならびに2月7日の「平泉学フォーラム」（於一関文化センター中ホール オンライン参加）において口頭発表し，それを三上喜孝「平泉出土文字資料へのアプローチ（1）饗宴と文字」『平泉学研究年報』1，2021年4月，48-67頁としてまとめた。

## 5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎三上 喜孝 本館研究部・教授

## (31) 受託研究

### 石川県珠洲市内での民俗調査

（研究代表者 川村清志）

#### 1. 目的

本研究では「奥能登国際芸術祭実行委員会（事務局：石川県珠洲市）」が実施する「大蔵ざらえプロジェクト」の推進のため，アートフロントギャラリーと共同作業を行い，地域社会に残存する文化資源の保存と活用についてのアクションリサーチをおこなう。「大蔵ざらえプロジェクト」は，石川県珠洲市の住民が保有する民具・祭具等を収集し，将来にわたって保存・活用するためのミュージアムを立ち上げるプロジェクトである。

#### 2. 今年度の研究計画

今年度は，「大蔵ざらえプロジェクト」の実施に伴い，次の3点を予定した。

- 1) それらの資料の量的な把握と資料としてのアーカイブの作成
- 2) 記録撮影とアーカイブズの作成
- 3) 芸術祭のための活用するための民具と保存を優先する民具との仕分け

#### 3. 今年度の研究経過

本プロジェクトについては，今年度はコロナ禍のため，実地の調査を進めることができず，現地で行われる作業，主に民具の写真撮影や資料整理とアーカイブズ化について助言を行った。

#### 4. 今年度の研究成果

現在のところ，研究成果を発信する段階にはない。

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎川村 清志 本館研究部・准教授



(32) 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団  
 沖縄祭祀アーカイブズの活用に関する基礎的研究—写真家・比嘉康雄の写真と記録を中心に— (2020年度)  
 (研究代表者 高科真紀)

1. 目的

写真家・比嘉康雄の祭祀に関する写真・記録類を資源化し、地域の人々の主体的な活用が展開されることで、祭祀を軸とした地域の精神文化や地域共同体の再生に寄与することを目指す。

2. 今年度の研究計画

沖縄県沖縄市の比嘉康雄アトリエで管理されている比嘉康雄資料のうち、祭祀の詳細を記録したノート113冊をデジタル化する。デジタル画像を参照して地域と祭祀ごとにノートの記述内容を入力し、内容情報の整理と分析を行う。祭祀についてどのような記述があるかを明らかにし、その記述内容について当該地域の関係者らに意見を求め、沖縄祭祀アーカイブズの活用モデルを提示する。あわせて、2020年11月に企画されている比嘉康雄写真展の関連シンポジウムで、写真展で取り上げる久高島の年中行事、イザイホーに関する記録ノート等を紹介し、沖縄祭祀アーカイブズの現代的意義と活用方法の検討に向けて報告する。

3. 今年度の研究成果

新型コロナウイルス感染症拡大により調査研究活動は著しく制限を受け、当初の計画から変更を余儀なくされた。国の緊急事態宣言及び沖縄県独自の緊急事態宣言、沖縄県への渡航自粛要請の期間を避け、出来る限りのコロナ感染症予防対策を講じて現地調査を実施した。医療体制が整っていない離島への往来は自粛したため、久高島や宮古島の関係者らと面談し、活用について意見を求める計画は未実施となった。

一方、計画していたノートのデジタル化は完了し、祭祀の記述に関する内容分析に関しては研究計画を達成することができた。また「イザイホーの魂／久高のニガイ 比嘉康雄・上井幸子」写真展の関連シンポジウム(2020年11月27日、琉球新報ホール)では、「久高島・まつりの記憶と記録-比嘉康雄アーカイブズ整理の現場から」という題目で報告した。報告の様子は録画し、編集したDVDを制作して関係者らに配付した。今年度実施できなかった比嘉康雄の祭祀アーカイブズ活用に向けた地域の人々との意見交流については、次年度以降に実施する。今後も沖縄祭祀アーカイブズの活用モデル提示に向けて研究活動を継続する予定である。

5. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎高科 真紀 本館研究部・特任助教

小屋敷琢己 琉球大学・教授

阿久津美紀 目白大学・助教

(33) 産学連携共同研究  
 清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究(花王株式会社)  
 2017～2021年度  
 (研究代表者 関沢まゆみ)

1. 目的

本研究の目的は、日本列島における「清潔」と「洗浄」について、通史的に概観するとともに、歴史資料から、詳細にその実態を問い直すための端緒を拓くことである。「清潔」をめぐる文化や政策を概観する研究は、2000年前後までさかに行われてきたが、それ以降、全体像を大きく見ることを目指しての事例は少ない。本共同研究は、この状況から新たな一歩を進めるため、論点整理を行い、「清潔」という文化全体を学際的にとらえていこうとするものである。

2. 研究組織 (◎は研究代表者)

西谷 大 本館・館長

大久保純一 本館研究部・副館長・教授

樋浦 郷子 本館研究部・准教授

久留島 浩 本館研究部・特任教授

後藤 真 本館研究部・准教授

橋本 雄太 本館研究部・助教

桑原 祐子 奈良学園大学・教授

金子 正徳 摂南大学・特任准教授

原 正一郎 京都大学・教授

ウルスラ・フレイ 京都大学・研究員

武馬 吉則 花王・エグゼクティブ・フェロー

原水 聡史 花王・感覚科学研究所・グループリーダー

鏡味 治也 金沢大学・教授

津田 浩司 東京大学・准教授

岩淵 令治 学習院女子大学・教授

中村 純二 花王・感覚科学研究所・室長

門地 里絵 花王・感覚科学研究所

◎関沢まゆみ 本館研究部・教授

### (34) 三菱財団研究助成 「日本列島の山村における環境・生業と、信仰・民俗宗教の研究—中国・四国地方の山村を中心に」 2020年～2021年 (研究代表者 松尾恒一)

#### 1. 目的

鈴木昂太氏(申請時:総合研究大学院大学日本歴史専攻在籍,現,東京国立文化財研究所研究員)とともに行った「日本列島の山村における環境・生業と、信仰・民俗宗教の研究—中国・四国地方の山村を中心に」は、中国・四国地方を中心に、両地域に伝承される神楽を主たる対象として、その祭儀・芸能の比較研究により、それぞれの地域の民俗としての特質を解明することを目的とする共同研究である。

いずれの地域も、前近代(少なくとも江戸時代)からの伝承であり、地域の農耕をはじめとする自然と密接に結びついた生業・生活と、農耕や山、飲料水や農耕に欠かせない水の供給源となる川や水源への信仰を強く有している点では共通している。比較の上で、標高400メートル前後の山村であるという点でも大きな共通性を有しながら、環境・生業において大きな相違が見られ、その差異に注目して、それぞれの地域の信仰・民俗宗教の特質を解明することを目的とした。

#### 2. 今年度の研究計画と研究経過

本共同研究は、中国・四国地方を中心に、両地域に伝承される神楽を中心に、その祭儀・芸能の特質を比較研究することを目的とする共同研究である。従来、民俗学や宗教学、文化人類学が主たるテーマとしてきた研究対象で、これらの研究においては、仏教・神道・陰陽道等の宗教や、民間信仰に焦点を当てて、フィールド調査による考察、分析が行われてきた。

しかしながら、本共同研究においては、それらの精神・民俗文化が、地域の生業や生活と深く関わることに焦点を当て、生業や生活と深く関わる自然環境についての調査をも実施した。さらに、民俗学・文化人類学ではほとんど扱われてこなかった歴史文献の発掘と解説、分析によって、歴史の変遷、主に前近代～近代における社会変容、宗教政策にも注目して、祭儀や信仰の変化の解明をも目指した。

#### 3. 今年度の研究成果

調査地として、「比婆荒神神楽」が伝承される広島県庄原市と、民俗宗教「いざなぎ流」が伝承される高知県香美市物部町の二地域の比較を計画したが、これに加えて広島県の中国山地の中央安芸太田地域に伝承される神楽の調査をも実施し、これにより、当初計画以上の成果をあげることができた。

いずれの地域ともに標高400メートル前後の山村に伝承される神楽において、荒神信仰が強く見られる点でも共通している。しかしながら、比較的広い水田が広がる広島県庄原地域と、急峻な山谷において、前近代～第二次世界大戦後まもなくまでは農耕においては、集落民自らの食料のために、粟・稗・蕎麦・大豆等を栽培する焼き畑を行い、換金のための生業として、杉・檜等を伐採する林業と製紙のためのミツマタの栽培を行ってきた物部町においては、荒神の信仰の内実は大きく異なり、その差異が、両地域の神楽の儀礼に特徴づけていることを明らかにすることができた。

##### 〔史的変遷への注目〕

本研究は従来、民俗学や文化人類学が主たるテーマとしてきた領域である。これらの研究においては、信仰や、仏教・神道・陰陽道等の宗教・信仰のみについてフィールド調査による研究が行われてきたが、本研究においては、民俗学・文化人類学ではほとんど行われてこなかった歴史文献の発掘と解説、分析による歴史の変遷、主に前近代～近代における社会変容、さらに神仏の信仰と関わる宗教政策にも注目して、祭儀や信仰の変化の解明をも目指した。

調査を行い、解読、分析を実施した歴史文献は、当地域の個人宅に所蔵されている下記の資料である。

\* 『 』は内題または外題。〔 〕は、内容に基づく調査者（松尾・鈴木）による認定題。

- 〔神楽能本〕慶安四年
- 〔勸請祝詞〕寛文二年二月吉日
- 〔神楽能本〕寛文四年丁甲四月吉日
- 『神数帳』寛文四年
- 『神能本』寛文六年
- 『伍大土公神祭文本 寛文七年・霜月
- 『神楽能本』延宝八年・庚申・三月十三日
- 『神道祭文』元禄八年
- 『三宝荒神神楽覚之日記』宝永二年・閏四月吉日
- 『三宝大荒神祭之帳』宝永三年
- 〔神楽歌本〕享保十二年
- 『三宝大荒神宮神楽神数帳 寛延四年・二月吉日
- 『義経之能本』宝暦十三年・二月吉日
- 『神能本』安永七年九月吉日
- 『神能本』嘉永八年・正月吉日
- 『神楽能本』嘉永八年
- 『神祇道御制儀』辰（年不詳）
- 〔神楽能本〕（年不詳）
- 『土公祭文』年不詳
- 『神能本』（年不詳）
- 『神能本』（年不詳）
- 『能ノ本 年不詳』
- 『能ノ本』（年不詳）
- 『惣神楽入用覚』（年不詳）
- 『王子神楽能本』（年不詳）
- 『王子神楽能本』（年不詳）
- 『王子能本』年不詳
- 『神楽入用帳』（年不詳）
- 〔今後の展望および課題〕

近年の神楽研究においては、古代における国家や一宮や大宮、あるいは権門寺院を中心とする地域統治のための祭儀が、中世期に、それらの社寺に所属した下級の宗教者（禰宜や神人）が、芸能的・娯楽的要素の強い神楽をはじめとする芸能を周辺地域に広めた、といった図式が提示されている。その際に、中世期には、古代以来の陰陽五行の思想や、神仏習合一神仏のさまざまな融合のかたち、…本地垂迹思想、八幡信仰、さらに中世日本紀に代表される中世神話、両部神道等々の影響を受けながら、民衆の生業と生活の安寧のための祈願、祈禱へと姿を変えて、地域に定着したと推測されるようになってきている。それが、再び国家体制下のもとで管理され、神祇信仰優位の思想・祭儀へと変容するのは、近世期に幕府によって敷かれた国家の宗教政策、吉田神道による宗教統制によるところが大きい。そのかたちが現代への伝承の基本形となった、と見通すことができる。

この推定を、さらに各地の神楽に即して、歴史文献に基づいて時代的変遷を明らかにすること、また、その際に、これまでのほとんどの研究では重視されなかった自然環境や共同体組織等の社会的な側面に注目することが不可欠である。

本共同研究においては、当初の計画に加えて、私費により中国山地のほぼ中央、広島県の安芸太田の神楽の調査をも実施した。安芸太田地域は、鉄・炭や、山からの材木を、広島市内を通過し瀬戸内海へと流れる太田川により、都市広島へ供給した。一方、生活に必要な塩や海産物等は、島根県の日本海に面する浜田等より街道を通じて行商人により運ばれてきたことを明らかにした。安芸太田の諸集落には、日本神話に基づく劇が多く創作された島根県の「石見神楽」が伝承されていることが知られているが、その伝播のルートが、塩の道である出雲と結ばれる街道であることが明らかになった。

この安芸太田地域の神楽の、こうしたあり方は、民俗文化の形成や、その広がりやの考究の上で、生業と、他地域との交流や物流等に注目することが、諸地域の伝統文化の享受の広がりやあり方を解明するために重要であること、

そのモデルケースとして、特筆される成果であると確信される。

〔災害・疫病と祈禱の民俗の解明に向けて〕

古代以来の弛まない全国にわたる山林の開墾による農地の拡大により生産の増大とともに居住地域が拡大した。それにより列島の人口は激増し（研究者により推定は異なるが、平安時代の人口約500万人、江戸時代元禄期には約3000万人）、近世期には、各藩の城下町や街道の要所の宿場町等、各地に都市が現出した。古代以来の大陸・半島との交流に加えて、中世後期には、アメリカ大陸、アフリカ大陸や中東・東南アジアを廻ってヨーロッパ人が日本を訪れるようになり、コレラ・チフス・赤痢といった病原菌がもたらされるようになった。国内においては、商工の発展とともに、街道の整備や海運による物流＝国内移動の高速化、人口の激増と列島各地での多くの都市の出現により、疫病が頻発するようになる。こうした疫病による生命の危機への対処のうで、中世～近世に、修験道からの影響も強く受けた神楽は、治病のための祈禱へと、地域の人々の需めに応じて変容、発展していったと考えられる。

神楽は、(死者の霊ではなく) 生きている人間の活力である「魂」に活力を与える、古代の「鎮魂」の祭儀を始源とする。それが、中世期以降、密教や陰陽道に基づく呪法を取り入れた、病人より疫神を退去させることによる治癒の祈禱へと展開してゆくのであるが、その歴史を、開墾・開拓による自然環境の変化や、社会変動との関係性に注目したマクロな視座からの研究が、世界的なコロナ禍に対する苦境が続く現在、とりわけ重要な課題となるだろう。

〔発表論文〕

- 1) 松尾恒一単著「仮面の呪術、祭祀、芸能としての神楽の生成—東アジアの視角より中世の神楽を考える」(松尾他編『神楽の中世』, 三弥井書店, 2021年5月)
- 2) 松尾恒一単著「民俗から問い直す日本の宗教・信仰 世界のなかの日本, 日本のなかの世界」299-326, (『日本宗教史1 日本宗教史を問い直す』, 吉川弘文館, 2020年9月)
- 4) 松尾恒一単著「稲作・狩猟の祈願・祈禱としての神楽」(『九州の神楽 シンポジウム2020』, pp.1-7, 宮崎県, 2020年12月)
- 5) 鈴木昂太単著「社会生活の維持と神祭祀—広島県備北地方の事例—」(儀礼文化学会編『儀礼文化学会紀要』(7・8号, 通巻第49号), pp.139~162, 2020年3月)
- 6) 鈴木昂太単著「祭祀組織研究と地縁・血縁—広島県備北地方の荒神名を再考する—」(長谷部八朗編著『「講」研究の可能性Ⅳ』, pp.172~225, 慶友社, 2020年5月)
- 7) 松尾恒一単著「祈る神と鎮める神—東アジアの宗教と民俗神—」(名古屋大学編『HERITEX』 Vol.3, pp.52-71, 455, 2020年3月)

##### 5. 研究組織 (◎は研究代表者)

- ◎松尾 恒一 本館研究部・教授  
鈴木 昂太 東京国立文化財研究所